

パランティア創設者
アレックス・カープ

金京鎮弁護士

パランティア創設者アレックス・カープ

ファシズムを恐れた人が築いた監視帝国

金京鎮弁護士

目次

1. 序文
2. 第1章 アウトサイダーの誕生
3. 第2章 哲学を愛した青年
4. 第3章 フランクフルトの社会理論家
5. 第4章 哲学者から億万長者CEOへ
6. 第5章 自由民主主義の盾
7. 第6章 テクノロジー共和国の宣言とシリコンバレー批判
8. 第7章 奇人の日常

序文

谷間の異端児

ある人物を左派か右派か、善人が悪人かで判別しようとする気持ちを一時的に脇に置かなければ、この本を読むことはできません。アレックス・カブは、そのような分類をたびたび逃れる人物です。

彼は公民権運動家の両親のもとで育った進歩主義者でした。その一方で、世界で最も強力な監視技術企業を創設しました。最も恐れていることはファシズムだと語ります。その一方で、そのファシズムが手に握ると誰よりも恐ろしくなる道具を作りました。ヒラリー・クリントンに投票した人が、民主党に向けて最も鋭い批判を浴びせます。一つの文で彼を閉じ込めようとすれば、彼はその文の外へ歩き出ます。

この本はその矛盾を縫合していません。矛盾を解くべき課題と見なさず、その人物を形作る素材と見なしています。文字を遅く読んでいた混血の少年がどのように哲学者になったのか、哲学者がどのように億万長者CEOになったのか、ファシズムを研究した学者がどのように戦場のソフトウェアを売る人になったのか。その道を辿ると、一人の人間の人生とともに、9・11以後のセキュリティ国家、データが権力となった時代、シリコンバレーとワシントンが絡み合う舞台が同時に見えます。

私はカブが正しかったのか間違っていたのかをこの本で断定していません。その判断は読者の役割として残しておきました。ただし、一つのことは明確にしたかったのです。彼は簡単に嫌ったり、簡単に愛することができる人物ではないということです。その不便さを最後まで抱えて行くことが、この本の約束です。

本を閉じるとき、答ではなく質問が残ることを望みます。データを握る人が世界を守ること、囲い込むこともできるのであれば、私たちは彼に何を委ね、何を委ねてはならないのか。その質問の前に、カブという一人の人物を立てています。

弁護士、前国会議員、AI政策研究者

kimkj.com

第1章 アウトサイダーの誕生

溪谷の異端児

フィラデルフィアのある週末、少年アレックス・カープは親の手に引かれてまた通りへ出かけました。ピケットを持つ大人たちの間で彼は背が低く、スローガンの意味をすべて理解していませんでした。反戦デモだったのか公民権集会だったのか、その日の旗が何に向けられていたのかは重要ではありませんでした。重要だったのは、そのような日が一度や二度ではなかったという事実です。カープは後年、自分の幼少期を回想して、少年時代の半分以上を親に付き添いながらデモ現場で過ごしたと述べています。他の子どもたちが週末に野球場へ行く間に、彼は行進する大人たちの足の間でアメリカという国の亀裂をいち早く学びました。

行進は観劇ではありませんでした。その家ではデモは家族行事でした。親たちは子どもを家に残して信念を実践しに出かける人々ではなく、子どもを連れて出かけてその信念が何であるかを身体で示す人々でした。行進隊列の声、警察の視線、プラカードに書かれた怒りの言葉たち。文字をゆっくり読んでいた子どもにさえ、その光景の温度だけは鮮明に刻まれました。世界は与えられたものではなく、戦って変えるものだという感覚。それがカープが受けた最初の教育でした。教科書より先に、街が彼を教えたのです。

家に帰ると、別の学校が待っていました。金曜日と土曜日の夜、ユダヤ教の安息日の食卓でした。ろうそくが灯り、食事が並べられた場所で交わされたのは軽い世間話ではありませんでした。カープの記憶によれば、食卓の話題は、保守主義者たちがいかに安い労働力を引き寄せてアメリカの労働者の基盤を崩壊させ、国を台無しにしているのかについての激しい議論でした。一食が一編の講演のようでした。幼い子どもには理解しがたい言葉が交わされましたが、その熱気だけは身体で感じました。差別に立ち向かって戦おうとする本能を、カープは母方から受け継いだと述べています。その本能は本から学んだものではなく、食卓で育ったものでした。

考えてみると、不思議な訓練でした。毎週2度、少年カープは大人たちがアメリカ社会の構造をめぐって繰り広げる議論を聞きながら育ちました。誰が誰を搾取するのか、権力はどこにあるのか、正義とは何か。他の家の子どもたちが漫画を見ていた時間に、彼は社会理論の初歩的な講義を受けたわけです。後に彼がドイツに渡って社会理論で博士号を取得することになるのを思い出すと、その道の出発点は大学の講義室ではなく、フィラデルフィアの安息日の食卓でした。

アレクサンダー・キャドモン・カープ (Alexander Caedmon Karp) は1967年10月2日にニューヨークで生まれました。家族はすぐにペンシルベニア州フィラデルフィアに引っ越し、彼はそこで弟オリバー・ベン・カープと一緒に育ちました。中間名のキャドモンは珍しい名前です。後に彼がロンドンで設立した最初の会社の名前もキャドモンになります。自分の名前の一片を会社に刻み込んだのです。一人の世界観がどこから来るのかと問うなら、カープの場合、答えは明らかです。それは互いにまったく異なる二人が出会ってなした家庭から来たのです。

父ロバート・ジョセフ・カープ (Robert Joseph Karp) はユダヤ系の臨床小児科医でした。子どもたちの身体を診察し、病気を治療する人でした。父方の家族はドイツから来た移民家族で、長年にわたって商業美術と織物業に従事した歴史を持っていました。布を織り、模様を施し、物を売買する仕事。手で作り、目で見える仕事は家族の古い生業だったわけです。医師となったロバートはその生業の伝統から一歩抜け出しましたが、何かを丹念に見つめ、扱う指先の感覚だけはその家族のものであったかもしれま

せん。

母リア・ジェインス・カープ (Leah Jaynes Karp) はアフリカ系アメリカ人の芸術家でした。彼女は一つの分野の周辺にとどまった人ではなく、世界的に認められた芸術家で、主に黒人の子どもたちが経験する苦痛をキャンバスに捉えました。1980年代初期にジョージア州アトランタで起きた黒人児童連続誘拐・殺人事件を扱った作品が、彼女の代表作の一つに数えられています。20人を超える黒人の子どもたちが相次いで命を失ったその事件は、当時のアメリカ社会の深い傷でした。リア・カープはその傷に目を背けず、キャンバスの上に引き上げました。一人は聴診器を手に子どもたちの身体を世話し、一人はブラシを手に子どもたちの傷を描きました。職業は異なりましたが、視線は同じ方向を向いていました。弱く、傷つきやすい存在に向けられた視線でした。

母方にはもう一人の学者がいました。母の兄ジェラルド・D・ジェインス (Gerald D. Jaynes) です。彼はエール大学で経済学とアフリカ系アメリカ人研究を教える教授でした。黒人芸術家の母と黒人経済学者の母の兄、そしてユダヤ人医師の父。カープが育った家族の知的地形はこのように広く深かったのです。弟ベン・カープもまた後に学者の道を歩んで日本の東京に渡り、住むようになります。一つの家族から医師、芸術家、経済学者、学者が生まれました。この家の空気には常に何かを深く掘り下げる気質が流れていました。

母にはもう一つの意外な側面がありました。韓国美術と文化に対する深い愛情でした。彼女は韓国美術品を集めただけでなく、韓国語と韓国美術を勉強するために毎年3ヶ月ずつ韓国に滞在していたと伝えられています。1970～80年代のアメリカで黒人女性芸術家がそのように韓国を往来したことは珍しいことでした。当時、韓国はアメリカ人にとって遠く異国の国でした。そのような場所に毎年3ヶ月ずつ訪れ、その国の筆遣いと色彩を学ぼうとした人がカープの母でした。カープが育った家はそのような場所でした。境界を越えることが日常だった家。人種の境界、職業の境界、国家の境界を平気で往来する人々の間で、彼は育ちました。

この家族が経済的に特に豊かだったわけではありません。しかし、知的・文化的資産は豊かでした。カープ自身も、家族の構成が人種にせよ文化にせよあまりに破格的で、隣人の目には完全な奇人集団に映ったであろうと述べています。客が家に来る前には心の準備をしっかりとるよう警告を聞かなければならないほどだったということです。冗談のように聞こえますが、その冗談の中に真実がありました。カープの家族は1970年代のアメリカ白人中産階級の基準からはかなり外れていました。ユダヤ人医師の父、黒人芸術家の母、その間に生まれた二人の混血の兄弟。向かい側の隣家の景色とは何一つ似ていない家族でした。

家の中の日常も一般的なアメリカ家庭と異なりました。カープ一家は毎週博物館に行くか文化行事に参加して週末を過ごしました。芸術が家の空気でした。絵画と音楽と本が居間の家具のように場を占めていました。その没頭がいかに強かったかという、カープは独立した後、実に10年間も博物館の近くにすら行かなかったと冗談めかして回想しています。食べすぎた食べ物は、しばらくの間は見たくもないものです。少年時代に芸術に没頭した人が、大人になってしばらく芸術から逃げたのです。愛情と倦怠はしばしば同じ根から生まれます。

この家族の気質を一目で示す逸話があります。ペットの犬ロージーの里親入りです。家族が保護犬シェルターを訪れたとき、スタッフの一人がすぐに安楽死させたいと泣き言を言っている犬がいました。理由は特異でした。その犬は人間だけが開けられる鍵を一匹で解いて脱出するだけでなく、他の犬たちのケージの鍵も全て開けて一緒に逃げさせていました。シェルターの悩みの種でした。スタッフには制御

不能な問題児でした。しかし、その話を聞くと、カープの母は躊躇なく宣言しました。あの犬が私たちの犬だ。鍵を開けて仲間まで解放する賢く反抗的な犬。規則を噛み、閉じ込められたものを解放する犬。その家にそれ以上にぴったりの家族はいませんでした。ロジータはこうしてカープ家族の一員になりました。閉じ込められた鍵を開ける犬を家族として迎え入れた家で、一人の子どもが育ちました。

温かく活気のある家でした。しかし、門の外の世界は異なりました。家の中で保護されていた子どもは、家を出た瞬間に別の身分になりました。白人ユダヤ人の父と黒人の母の間に生まれた混血児として、カープのアイデンティティはどの一つの集団にもきれいに収まりませんでした。彼は自分のことを形態が不明確だと表現しました。英語で amorphous、すなわち輪郭がはっきりしないということです。人種的には曖昧で、ユダヤ人コミュニティに入り込むにはユダヤ人らしくありながらも、どこか異質でした。黒人社会でも状況は同じでした。カープの回想は短く正確です。ある黒人たちは私を黒人と見なしたが、ある黒人たちはそうは見なかった。どちらからも彼は半分だけ受け入れられました。半分は同じ側で、半分は見知らぬ人。その中途半端な位置が彼の位置でした。

弟との違いもこの分裂をさらに明らかに映し出します。同じ親の下で育った兄弟でしたが、ベンは自分を完全な黒人青年として強く同一化させた一方、アレックスは次第にユダヤ人としての自覚に、より多くの重みを置く方向に傾きました。同じ血を分けた二人の兄弟が、異なるアイデンティティの扉を開いて入ったのです。一本の血筋から分かれた二つの道です。誰が正しいか間違っているかの問題ではなく、混血が背負う選択の重さを示す場面です。混血児として生まれた人は、自分が誰であるかをもう一度決める必要があります。単に与えられるのではなく、選ぶべきアイデンティティ。その選択の分岐点で、兄弟は互いに異なる側へ進んでいきました。

カープはこの分裂を結局は縫合するのではなく、自分のやり方で抱きしめました。私は自分を単に『自分』として見る。そして、私を受け入れてくれるすべてのグループに栄光を感じる。どこにも完全に属さない人が見つけた妥協でした。ある一つのグループの一員になることを諦める代わりに、私を受け入れてくれるすべてのグループに感謝することにしました。所属を放棄した場所で、彼は一種の自由を発見しました。どの旗の下にも完全に立たない人は、すべての旗をやや離れたところから眺めることができます。

学校はこの感覚を和らげてくれることはできませんでした。カプはフィラデルフィアの進学校セントラル高等学校を1985年に卒業しました。賢い子どもたちが集まった場所でした。その後、ペンシルベニア州のハバースフォード大学、そしてスタンフォード・ロースクール、ドイツのフランクフルトにあるゲーテ大学へと続く華々しい学歴を積み重ねましたが、どの機関でも主流に属しているという安心感を得ることができませんでした。彼の言葉はこうです。「私が経験してきたあらゆる機関で、私はいつも他の者たちと違うと感じていた。ここを巧みに切り抜けることはできるかもしれないが、決してこのグループの本当の一部になることはできない。」彼は無意識の奥底に一つの前提が横たわっていたと告白しました。「私たちはお互いによく似合っている」と言うどんなグループであっても、本質的には自分を含まないという前提でした。有名校の卒業証書もこの前提を消し去ることはできませんでした。内側に入るほど、彼は自分が客人であることをより明確に感じるようになりました。

帰属感をどこで見つけたのかを見れば、カプという人間が見えてきます。セントラル高等学校時代、彼と最も親しく付き合った友人たちは韓国系であり、最初の彼女も韓国人だったと彼は回想しています。母親が韓国を行き来していた家の子どもが、学校でも別の周辺に立つ人々と通じ合いました。偶然ではないでしょう。主流に属さない人間は、しばしば別の周辺に立つ人々とまず統合します。同じ場所から外れた人同士は言葉が早いのです。どのグループにも完全には属さなかった少年は、自分のように周

辺に立つ人々のそばで、初めて呼吸をすることができました。

帰属感の欠如がカブを外部から押し出す力であったなら、彼を内部から異なったものにした別の力がありました。幼い頃から患っていた重度の難読症です。混血が彼をグループの周辺から押し出したなら、難読症は彼を普通の学習の周辺から押し出しました。二つの放逐が一人の子どもの上に重なったのです。

カブは長年この事実を隠して生きてきました。難読症を恥ずべきものと考えていたからです。賢い家庭に育った賢い子どもが、文字を正しく読むことができないということは、その当時の彼にとって明かし難い秘密でした。難読症は、単語を読み書きするのを遅くするだけではありませんでした。他の者たちが従う標準的な学習法、模範解答、定められた道を歩むことを最初から不可能にしました。他の子どもたちが教科書の文字を通じて世界を受け入れ、その体系に溶け込んでいたとき、カブはそのテキスト中心の秩序に加わることはできませんでした。

カブ自身が難読症を説明する方式はユニークです。彼は難読症を分類体系やテキストとの関係が弱まった状態だと定義しています。通常の間人は、文章や規則を読むときにそのテキストと一対一で結びつきます。テキストがすなわちその人になるのです。規則を読めば規則が身に着き、分類を学べばその分類で世界を見ます。しかし難読症を持つ人間は、博士号を取得して文章を上手に書くようになった後でも、結局のところテキストと一対一で結合することはできません。文字と規則と分類体系の間に常に小さな隙間が残ります。その隙間のため、カブは他の者たちが当然のように従うプレイブック、つまり定められた模範解答に従うことができませんでした。従うことができないのだから、作る必要があったのです。既存のプレイブックを習得できない人間は、自由に思考する方法を学び、新しいものを自ら発明する以外に道がないのです。

その発明には対価がついてきました。他の者たちのように普通に学び、情報を処理するために、カブは1分の努力で済むことに10分の力を注ぎ込む必要がありました。同じ結果を出すために10倍の計算を回す必要のある頭脳だったのです。そのため彼は自分に極度に厳格で規律ある生活を強制しました。気を抜けば追いつけなかったからです。そこに注意欠陥多動性障害、ADHDまで重なりました。一度に一つのことに集中することが彼にとって大きな課題でした。彼は過去、会話の3分の2を空想で流してしまったと明かしています。相手の話を聞いている間も、頭は別のところを彷徨っていました。その散らばる精神を捕えるために彼が選んだのが太極拳でした。毎日ゆっくりと体を動かしながら心を一点に集める訓練。後に彼が瞑想と太極拳に没頭する変人として知られることになったのも、その根は幼少期のこの散漫さとの闘いにありました。

ところが、この苛酷な弱点が思いがけない武器も一緒に育てたのです。カブは独自の情報処理方式を持つようになりしました。頭の良い彼の家族たちは、豊富なデータを積み重ね、その上に段階的に論理を築いて問題を解きました。資料が多いほど強い人たちだったのです。カブはその正反対でした。彼はデータが希少であるか全くない場所、情報の末端で、むしろ強かったのです。他の者たちが丸二日かけて解く必要のある問題を、彼はわずかな手がかりだけで直感し、1分で判断を下しました。定型化された知識を暗記することは弱かったのですが、資料が不足している見慣れない状況でパターンを読み、他の者たちより数年先に判断することは誰にも劣りませんでした。霧の中で道を見つける能力だったのです。皆が地図を眺めているとき、彼は地図のない場所で方向を定めました。

自分が何ができないのかを深く知ることも、彼の力になりました。弱点を正確に知る人間は、そこに手を出しません。カブは自分が弱い分野には全く手を付けず、最も得意な一つのことだけに全てをかけました。できないことを掴んで格闘する代わりに、得意なことを最後まで押し通す戦略。これは弱点か

ら生まれた生存本能でした。弱点が明確な人間は、強みも明確になるのです。

転機は一人の人間の手からもたらされました。セントラル高等学校時代、エリート校に通いながらも他の者たちと異なる学習方式のため苦勞していたカプを、一人の助言者が注視していました。彼女は彼に知能検査を受けさせました。そして結果を見ると、彼女はこう言いました。「君はこの学校で最高の成績を取らなくてははいけない。」読むことで躓いていた子どもが、実は優れた頭脳を持っていたという事実が明らかになった瞬間でした。彼女はそこにとどまらず、彼を積極的に世話し、引っ張ってくれました。カプはこの経験を生涯、深い敬意とともに心に留めています。一人の目利きの大人が、一人の子どもの人生経路を変えることができるという証拠だったからです。文字に閉じ込められて自分の内部のものを見るができなかった子どもに、彼女は鏡を掲げて見せたのです。

秘密を世に完全に明かすきっかけは、意外にも些細なものでした。大人になった或る日、ドイツにいる友人と話をしていた最中に、カプは無意識のうちに告白しました。「そういえば、俺、難読症なんだ。」数十年隠してきた秘密でした。友人の返答は短かったです。「そうなんだ。塩ちょっと取ってくれる？」その瞬間、カプは気づきました。誰も気にしていないということに。生涯、恥じてひそめてきたその事実が、実は他の者たちにとっては塩を手渡すことと同じくらい大したことではなかったのです。彼はようやく他人の視線から解放され、自分の神経多様性をありのままに受け入れました。（このエピソードをカプが言及した時点から推測すると、カミングアウトの瞬間は2010年代後半頃と見られます。）彼が難読症について残した評価は粗野で率直です。それが自分を台無しにしたが、同時に飛べる翼を与えてくれたということです。洗練されていない表現の中に、真実の両面が全て含まれています。台無しにしたのも事実であり、飛べるようにしたのも事実なのです。

後にカプはこの弱点を弱点と呼ぶことをやめます。彼は難読症のような神経多様性を強みに、さらには時代の武器へと引き上げるのです。標準から外れた脳が標準が見ることのできないものを見るという信念です。他の者たちと同じプレイブックを使うができなかった人間だからこそ、プレイブック自体を疑う人間になるのです。カプはこの逆転を楽しげな比喻で説き明かします。まるで北欧神話の神オーディンやロキが天から降りてきて、「カプよ、お前は子ども時代に大変だったろう。今や世界全体をお前の難読症患者に合わせてやろう」と宣言したようなものだというわけです。幼少期に彼を苦しめた弱点が、大人になった彼に世界を異なる眼で見る視点として返ってきたわけです。彼が自著のタイトルを最初は『難読症患者の復讐』と付けようとしたというジョークも同じ場所から生まれています。文字から疎外された子どもの復讐。その復讐の輪郭が何であるかは、この本の後半のページでやがて明かされるでしょう。ここでは、その種が幼年期に蒔かれたということだけを指摘しておきます。

三層のアイデンティティが一人の子ども上に重ねられました。ユダヤ系とアフリカ系アメリカ人の混血、急進的進歩主義の家庭の息子、そして重度の難読症を持つ学生。この三つはすべてアメリカ社会の主流基準から外れた位置にありました。人種において外れ、政治において外れ、学習方式において外れています。一つだけでもアウトサイダーになるに十分でしたが、カプはその三つを一度に背負いました。その結果、彼の心の底には一つの前提が根付きました。世界は自分のために回転せず、自分を守ってくれることもないだろうという前提です。いつ訪れるか知れない破滅への警戒、迫害の対象となる条件をつねに点検する習慣。これは悲観主義というより生存の姿勢に近いものでした。自分を守ってくれる柵がないと信じる人間は、自ら柵を立てる方法を考案することになるのです。

この姿勢がどこまで進んだかを示す言葉があります。2023年のあるインタビューで、カプは自らの脆弱性を不気味な言語で表現しました。「私はいつも考えていた。この世界にファシズムが到来するなら、真っ先に、あるいは二番目に銃で撃たれて壁に掛けられる人間は、まさに私だろうと。」ユダヤ人

であり、かつアフリカ系アメリカ人との混血である自分が、迫害の一番目の対象となるであろうという計算を、彼はジョークではなく、綿密な自己認識として心に抱いていたのです。誰が先に連れ去られるのかを、彼は知っていました。歴史の中で最初に壁の前に立たされた人々が誰であるかを、彼の血筋が記憶していたからです。幼少期にデモ現場で学んだアメリカの亀裂が、大人になった彼の内部でこのような文章へと育っていたのです。

ここにこの本全体を貫く逆説の種があります。ファシズムが来れば真っ先に死ぬ人だと自ら規定したこの男は、後にそのファシズムが手に握ったなら誰よりも恐ろしくなる道具を作る人になるのです。迫害を恐れた人が監視の技術を売ようになるのです。少年時代のカプが抱いた恐怖は単なる傷跡に留まりませんでした。それは方向を変え、異邦人を受け入れることができる西洋社会の法治と自由を圧倒的な軍事技術で守らなければならないという信念へと至るのです。自分のようにどこにも属さない人も生きていくことができる社会、そのような社会を守るにはその社会が敵より強くなければならないという論理です。恐怖が信念の燃料になったのです。後年、彼が米軍についてアメリカ社会ではじめて人種統合を実現した真の能力主義機関だと賞賛を送ったのも、疎外と差別に敏感だったこの幼少期と無関係に見えませんか。（この接続はカプ本人が明示的にした陳述というより、彼の発言を繋ぎ合わせた解釈に近いです。）

もちろん、その信念が正しかったのか、彼が作った道具が弱い者を守ったのか、それとも新たな危険を生み出したのかは別の問題です。その問いはこの本が終まで抱き続ける質問です。今ここで明らかなことはひとつです。そのすべての矛盾の出発点がフィラデルフィアのひとつの家だったという事実です。デモの現場と安息日の食卓、黒人の母親とユダヤ人の父親、錠前を開ける犬と文字が読めない子。この風景の中で一人の人の世界観が形作られたのです。

1967年ニューヨークで進歩主義家庭の混血少年として生まれた子どもは、どこにも属さないという絶対的な疎外感を生存の本能に変えながら成長しました。彼は自分を守ってくれる集団がないと信じたので、自分自身を守る方法を工夫し、標準の道が塞がれたので、自分だけの道を開きました。完璧なアウトサイダーでした。そしてアウトサイダーはしばしば、中にいる人たちが見えないものを見ます。敷居に腰かけた人は、部屋の中の風景と部屋の外の風景を同時に見ます。カプが何を見たのか、その見方がどのような形を整え始めたのかは、彼が哲学に出会ってからです。文字をゆっくり読んでいた少年が生涯つかむ武器を発見した場所。そこはペンシルベニアの小さなクエーカー大学でした。

弁護士、元国会議員、AI政策研究者

kimkj.com

第2章 哲学を愛した青年

溪谷の異端児

ペンシルベニア州ハバーフォード。フィラデルフィアから西へ車で30分の距離にある小さな町です。1985年秋、17歳のカプがこの大学のキャンパスに到着しました。ハバーフォード大学は、1学年が約300人の小さな学校です。1833年にクエーカー教徒たちが設立した学校で、信仰の痕跡が学風に深く浸み込んでいます。試験監督官なしに学生が良心に従って試験を受ける名誉規約が今も生きており、授業は教授と学生が机を向き合わせて質問と答弁をする小さなセミナーで進みます。大きな講堂で数百人が筆記する大規模講義ではなく、一人一人の思考を徹底的に追及する学校でした。字をゆっくり読む子どもにとって、これより適した場所を見つけることは難しかったでしょう。

カプは哲学を選びました。金儲けからは遠い専攻です。医者になったり弁護士になったり実業家になる道ではなく、人間はどう生きるべきか、正義とは何か、社会はどう動くのかといった答えのない問いを生涯抱きながら生きる道です。親が聞けば溜息をつくような選択だったかもしれません。医者である父を持つ家の息子が医学部に進まず、一握りの土ほども手に握れない学問に向かったからです。しかし、この選択は彼にとって自然なものでした。幼い頃から食卓で保守主義者たちがアメリカをどう壊しているかをめぐって激論が交わされた、その家の子どもでした。デモ行進の旗の下で、アメリカの亀裂を先に学んだ子どもでした。そういう子どもにとって、哲学は見知らぬ外国語ではなく、家で使っていた母国語に近かったのです。

ハバーフォードはその母国語をより精密に磨いてくれました。小さな学校の哲学の授業は、巨大な名前たちの系譜を暗記する場所ではありませんでした。プラトンが正義をどう定義したか、カントが道徳をどこに立てたか、そうした問いを学生が7、8人囲んで一学期中ずっと噛み付く場所でした。教授が答えを与えるのではなく、学生が自ら答えを作ってきて、他の学生に叩きのめされる構造でした。カプはこの叩きのめされる構造が好きでした。字をゆっくり読む彼でしたが、一度あるコンセプトをつかむと、それを最後まで押し通すことで誰にも負けませんでした。言葉での戦い。それが彼の武器でした。本のページを素早くめくることはできなくても、一文をめぐって一時間も論争することができました。

難読症も一役買いました。標準的な学習方法が遮られた子どもは、別のルートで世界を受け入れる独自のやり方を早くから育んでいました。教科書を最初から最後まで順序に読み進めることは彼にとって苦役でしたが、ある概念を頭の中で思い回しながらその構造全体をつかむことには、人並みならぬ才能がありました。抽象の世界では、字を読むゆっくりさが弱点にはなりません。むしろテキストの表面に縛られず、その下の骨組みを見る力になりました。哲学はその力が思いっきり躍動できる運動場でした。

しかし、ハバーフォードの小さな教室の中でも、カプは自分が結局よそ者だという感覚をぬぐえませんでした。後年彼は、自分が通った全ての機関について同じことを述べました。ここを上手く切り抜けることはできるだろうが、決してこの集団の真の一部にはなれないということでした。ハバーフォードも例外ではありませんでした。彼はそこの空気を吸い、そこの言葉を学びましたが、心のどこか片隅では常に脇に寄っていました。属さない人の視線は、しばしばより遠くを見ます。中に完全に入った人には見えない壁の亀裂を、閾値に腰かけた人がまず気づきます。

後年カプは、自分がどこで多く学んだか順序立てて数えたことがあります。第一がフィラデルフィアのセントラル高校、第二がハバーフォード、その次がスタンフォード、そして最後がフランクフルトの

ゲーテ大学でした。世界最高と言われる大学を後ろに置き、高校と小さなリベラルアーツ・カレッジの前に置いたこの順序は、彼という人物をよく示しています。彼にとって学びは学校の名声に比例してませんでした。彼を育てたのは巨大な機関ではなく、彼を一人の人間として向き合った小さな場所でした。

ハバーフォードの名誉規約は彼にもう一つのことを教えました。監視がない場所で人間がどう行動するかという問いです。試験監督官のいない部屋で学生は自分自身を監督しなければなりません。規約を守ることも破ることも、全く良心の責務です。信頼が制度になった学校でした。幼きカプはその信頼の空気の中で4年を過ごしました。後年彼が監視と信頼、自由と統制の間で生涯綱渡りをする人になるということを思い返ると、この小さなクエーカー学校の良心規約は不思議な伏線のように読めます。ただしその時の彼はそのような綱渡りを予想もしていませんでした。ただ自分に合った学校に出会ったと感じただけです。

1989年、カプはハバーフォードで哲学の学士号を受け取りました。彼は21歳でした。社会理論家になりたいという夢がすでに彼の中で育っていました。一人の実業家や技術者ではなく、社会がどのように動くかを説明する人になるという夢でした。世界を変えるには、まず世界がどのように動くかを知る必要があるという信念。その信念の根には、食卓の激論と街の行進がありました。不正を見ると我慢できない気質を、彼は母方から受け継いだと言いました。その気質が学問の言葉に出会い、社会理論家という夢に育ったのです。その夢を追いつめる道はいくつもありませんでした。しかし、彼が最初に選んだ道は意外でした。それは法律でした。

カプはカリフォルニアへ向かいました。スタンフォード大学ロースクールです。

なぜ法律だったのでしょうか。法律そのものを愛していたからではありませんでした。彼の計算はこのようなものでした。法学の学位を手に入れば、実際に人を助け世界を変えることができるだろうということでした。進歩主義者であり、自らを社会主義者と見なしていた青年が、弱者の側に立ち、不正と戦う武器として法を選びました。理想主義者の選択でした。頭の中の哲学を現実の変化に移すための橋として法を見たのです。

順序を確認するとこの選択の重みがより良く見えます。彼は1989年ハバーフォードを卒業するとすぐさまスタンフォードに向かいました。哲学で学士号を取得した人が博士課程ではなくロースクールに進路を変えたのです。学問の道から実践の道へ、本の世界から法廷の世界へ。頭の中だけにあった正義を、手で触れることのできるなにかに変えたいと思ったのです。食卓で学んだ怒りを、デモ現場で習った信念を、今度は職業に変える番だと彼は信じていました。弁護士になって不当な者たちと法廷で対峙するという絵図。そこまではすっきりしていました。

その橋は崩れました。急速に。

スタンフォード・ロースクールでカプが直面した現実、彼の期待と正反対でした。その同級生たちは、世界を変えるために法を学んでいる人たちではありませんでした。彼らの目は一つの方向を向いていました。一流の大型法律事務所に就職し、名声と金銭を手に入れることでした。講義室の空気はその強迫観念でいっぱいでした。誰がどの法律事務所の夏のインターンシップを獲得したか、誰がどの判事の下で裁判研究員になるか。そのような話が人々の口に上ったり下ったりしていました。カプはその空気の中で息が詰まりました。

スタンフォードはどんな場所でしょうか。シリコンバレーの中心にある学校です。そこを卒業した人たちがGoogleを、Yahooを、後の多くの企業を設立しました。世界どこにもないほど密集した人脈と技

術のネットワークがそのキャンパスに敷かれていました。ところが1990年頃のカブはそのネットワークがそこにあるという事実さえ気づきませんでした。自分の足下に金鉱があるのに、彼はその上を無心に歩き回っていました。彼の目は別の場所を見ていたからです。本と思想、そして終わりのない議論でした。

彼が抱いてきた理想主義は急速に砕け散りました。人を助けるために法を学びに来たのに、実際にはその人を助けることに誰も関心がありませんでした。講義は判例を暗記し条文を分析する技術の連続であり、その技術が誰のために使われるかという問いは講義室のどこにも見当たりませんでした。カブは冷たい現実を一つ悟りました。自分が興味を感じることができない仕事をしながら人を助けることは不可能だということでした。心が向かない仕事には手も向きませんでした。だから良い弁護士になって弱者を助けるという絵図は、最初から彼に合わない衣服でした。

後年カブはスタンフォード・ロースクールで過ごしたその時間について、自分の成人期を通じて最悪の3年だったと語りました。彼は学校の勉強を後回しにしました。講義室よりも本を読み、人々と議論することに時間を費やしました。そして一つの教訓を得ました。自分が信じていない仕事は決して遂行できない人間だという気づきです。スパナを回す雑仕事でも、心が動かなければ手は動かないということでした。この気づきは彼をより深い孤立へ押し込みました。皆が向かう道を彼は歩むことができなかったからです。彼にとってロースクールの3年は、学問の修練ではなく、無理やり務めなければならない3年の懲役刑のようなものでした。

彼が感じたもどかしさには、時代の空気も混ざっていました。1990年代初期のアメリカのロースクールは、一つの成功の絵図を学生たちに押し付けました。良い成績で卒業し、有名な法律事務所に入り、数年以内にパートナーになるという絵図です。誰もその絵図を疑いませんでした。それが正しい人生か、自分に合った人生かを問う人はまれでした。皆が同じはしごを同じ速度で登っていて、そのはしごに乗らない人は脱落者でした。カブはそのはしごの下に立って、上へ列をなして登っていく同級生たちの背を見上げていました。登る気がありませんでした。登ることもできませんでした。彼にはそのはしご自体が無意味に見えたからです。信じていない仕事には手が動かない人にとって、皆が行く道はむしろ孤独な道でした。

ところがまさにその懲役刑の中で、カブの人生全体を変える一人の人物が彼を待っていました。

同じ寮。同じ授業。そこにピーター・ティールがいました。

二人が初めて向かい合った時の光景を想像してみます。一方には、ユダヤ系黒人混血の進歩主義者がいます。マルクスを信奉し、自分を社会主義者と呼ぶ青年です。向かい側には、ドイツ系移民家庭に育った自由至上主義者がいます。スタンフォード大学学部時代からすでに右派メディア『スタンフォード・レビュー』を創刊し、キャンパス内で悪名をとどろかせた資本主義者です。左と右、社会主義と資本主義。これほど遠く離れた二人を見つけることは困難でした。

それでもこの二人は友人になりました。

何が彼らを結びつけたのでしょうか。二人ともスタンフォード・ロースクールという場所を軽蔑していました。出世に目が眩んだ同期生たちの画一的な雰囲気、二人とも耐え難く感じていました。その軽蔑が最初の絆でした。二番目の絆はさらに深かったのです。二人とも論争を愛していました。それも丁寧に意見を交わすようなタイプの論争ではありませんでした。

夜が更けていく寮の部屋。チェスボードの上に駒が置かれ、ビール瓶が転がっています。二人の青年が向かい合って座っています。外では同期生たちがロー・ファームの面接準備に没頭しているその時間に、この部屋の二人は死んだ哲学者たちの名前を巡って声高に論じていたのです。一方がマルクスの疎外された労働を持ち出します。人間が自分の労働の結果から乖離し、働きながらも自分の人生から遠ざかるという話です。工場労働者が自分が作った物がどこへ行くのかも知らないまま部品のように回されるということです。カープが声を高めます。周囲の全ての人々がそのように生きています。このロースクールの同期生たちさえ、自分が本当に望むことが何なのかも知らないまま、ロー・ファームというコンベアベルトの上へ一列になって登っていついていっていると。ティールが受け継ぎます。それは資本主義がもたらした豊かさを見ない者の甘えでしかないと。人々は押しやられるのではなく、自ら選択しているのであり、市場はただその選択の総和でしかないと。

カープがヘーゲルを引き出します。ヘーゲルの弁証法は、矛盾する二つの思想が衝突してより高い段階へ進むという思考です。正しい主張とそれに対抗する主張が衝突すると、どちらかが勝つのではなく、両者を抱擁した新しい答えが生まれるということです。その中でもカープが好んで取り出したのは、主人と奴隷の弁証法でした。主人が奴隷を支配するように見えますが、実は働き方を知っているのは奴隷であり、手に泥を塗りながら世界を変えるのも奴隷であるという逆説的思考です。時間が経つと、誰が本当の主人なのかが反転するという話です。誰が本当の主人なのか。その問いをカープはティールの顔に投げかけます。自分が今展開している論理そのものがヘーゲルの弁証法をそっくり真似していることを、彼は知りながら楽しんでいたのでした。

ティールは別の井戸から水を汲んできていました。ルネ・ジラールです。ジラールはフランスの人類学者であり哲学者で、人間の欲望は自分の内から生じるのではなく、他人を見て真似することから生じると考えていました。模倣欲望です。隣の人がある何かを欲しがると、自分もそれを欲しくなるということです。そしてその欲望が衝突すると争いが起こり、その争いを鎮めるために社会は一人を生贄として選び、みんなの怒りをその人に注ぎ出すと考えていました。ティールはこの思考の熱烈なファンでした。

カープにはもう一つの井戸がありました。マルティン・ハイデッガーです。ハイデッガーはドイツの実存哲学者で、人々が生涯を生きながらも、実は生きるということが何かという根本的な問いは忘れて生きていてと考えていました。人々は他人が生きるように、世界が命じるように生きながら、自分が本当に生きていくという事実そのものを忘れてしまうということです。存在すること自体に問いを投げかける哲学です。カープはこのハイデッガーに深く没入していました。彼の見方では、ロースクールの同期生たちはまさにその忘れた人々だったのです。良い成績、良いロー・ファーム、良い給与。定められた道を疑いなく踏みながら、自分がなぜ生きるのかは一度も問わない人々。ハイデッガーの言葉に直すなら、彼らは存在しながらも存在を忘れた者たちでした。

ここにこの章の妙味があります。二人は正反対の立場から互いに押し合いました。ティールは欲望が他人を真似することから生じると見るジラルルの立場に立ちました。カープは矛盾の衝突から歴史が前へ進むと見るヘーゲルの立場に、そして存在の意味に問いを投げかけるハイデッガーの立場に立ちました。一方は人間を真似する動物と見、他方は人間を矛盾を抱擁し意味を探す存在と見ます。二人は同じ机を間に挟み、一寸も引きませんでした。

カープはこの論争をひと言で言い表しました。私たちは野生動物のように戦ったと。上品な学術討論ではありませんでした。互いの論理の穴を容赦なく掘り下げ、隙を見つけたらそこを噛み砕く戦いでした。ティールの回想も似たようなものです。カープは狂った左派であり、自分は狂った右派だったが、それでも二人はどうかして互いの言葉を理解していたと、彼は言いました。

チェスボードはその戦いの小さな舞台でした。チェスは言葉による戦争です。相手の手を読み、罠を仕掛け、数手先を見通すゲームです。二人が毎晩チェスボードを間に挟んで向かい合っていたという事実は偶然ではありません。彼らはチェスをしながら思想を打ち、思想を打ちながらチェスをしていました。一方が駒を一つ動かすと、他方がその手の弱点を指摘しました。一方が論理を一つ展開すると、他方がその論理の隙間を突きました。ゲームと論争は一体でした。誰が勝ったかは重要ではありませんでした。重要なのは、毎回新しい夜明けが来るまで盤が終わらなかったということです。

奇妙なことです。政治的にこれ以上離れることはない二人が、なぜ互いから離れることができなかったのでしょうか。答えはその激烈さそのものにあつたのかもしれません。出世にしか目がない他の同期生たちの中で、二人は互いを認識しました。本当に思考している人に出会ったのです。自分の信念を最後まで押し通し、相手の信念も最後まで聞く人。非順応主義者二人が、順応の海の真ん中で互いを掴んでいました。一人はマルクスの言葉で、他人は市場の言葉で同じものを憎んでいました。二人とも群れを成して流される事を耐えることができませんでした。カープはそれを資本主義の疎外と呼び、ティールはそれを群衆の模倣と呼びました。憎む対象は同じだったのに、その憎しみを説明する哲学が正反対でした。だから二人は争うほど近くなったのです。

その戦いは二人の結論を一つにすることはできませんでした。カープは最後まで左派でした。ティールは最後まで右派でした。しかしその戦いは二人の論理を刀のように磨きました。相手が投げかける反論に耐えるためには、自分の考えをより堅牢にしなければならず、その過程で二人ともお粗末なスローガン捨て、本当の思考に到達しました。敵が私を育てるという言葉がこれほどぴったり当てはまる場合も稀です。

後年、カープが残した言葉がこの時期の本質を指摘しています。知的なライバルを渋々ながらも尊敬することができるのが莫大な利点になるということでした。感情に流されて怒ったり、自分は正しく君は間違っているという道徳的独善に陥らず、相手の主張をまっすぐに向き合って戦う方法。カープはそれをこの寮の部屋で学びました。

この言葉をかみしめる価値があります。人は通常、自分と意見が異なる相手を憎んだり無視したりします。その人は間違っていると断定し、耳を閉じます。そうした方が心が楽だからです。しかしカープが習得したのはその正反対でした。自分に厳しく反論する人こそが自分を育てるということです。ティールはカープの左派論理に容赦なく穴を開け、カープはその穴を塞ごうとして自分の考えをより堅牢に磨きました。二人は互いの砥石でした。憎みながら削られ、削られながら鋭くなったのです。敵でありながら師だったわけです。

敵と戦いながら敵を尊敬する方法。この逆説の技術は、後年彼が政治的に正反対の人々と一つの会社を設立し、自分と相反する権力者たちと取引しながら生きていく基礎となります。パランティア社がある左派哲学者CEOと右派資本家会長という奇妙な組み合わせで運営されるようになったその出発点は、まさにこの寮の部屋のチェスボードでした。政治色が正反対の二人が一つの会社をほぼ三十年近く共に牽引できた秘訣は、もしかすると最初から彼らが互いに同意して結ばれた仲ではなかったことにあつたのかもしれません。彼らは同意せず尊重する方法をまず学びました。その最初の練習相手がピーター・ティールでした。三十年以上続く奇妙な友情の出発点でした。

1992年、カープはスタンフォード・ロースクールを卒業しました。法学博士号を手に入れました。そこまで憎悪していた三年の懲役が終わったのです。

学位を得たからといって弁護士になるわけではありません。アメリカで弁護士として働くには、別途弁護士試験に合格する必要があります。カープはその試験を受けませんでした。一度も受けませんでした。後年のあるインタビューで、ロースクールを三年も通ったのに弁護士試験は受けたことがないのかと聞かれると、彼は断固として答えました。いいえ、全くないと。自分は一度も弁護士だったことがなく、その事実を大変誇りに思っていると、彼は言いました。

奇妙な自尊心に聞こえます。三年をかけて得た学位を紙切れにする選択だったのですから。弁護士試験一つで終わることでした。スタンフォード法学博士という看板に、弁護士資格証一枚を加えるだけで、どのロー・ファームでも彼を採用したことでしょう。生涯の安定が試験一つ向こう側にありました。しかし彼はその試験会場に入りませんでした。一度も。

この拒否の重みを考えてみます。普通の人は三年を投資したのだから元は取らなければならないと考えます。沈没費用という言葉があります。すでに注ぎ込んだものももったいなくて、心に引っかかる道を最後まで行く心理です。カープはその心理に正面から逆らいました。三年がもったいなくて弁護士になるより、三年を丸ごと捨てて自由になることを選んだのです。しかしカープにとってロースクール卒業証は弁護士への関門ではありませんでした。それは恐ろしかった三年が終わったという解放の合図でした。彼はロースクールで、自分が信じていない仕事はできない人間だということを学びました。その悟りを行動に移したのです。法曹界という、誰もが羨む安全な道を、彼は丸ごと蹴飛ばしてしまったのです。

では、どこへ向かうのか。彼の心は再び哲学へと戻っていました。社会理論家になるという最初の夢がまだその中に生きていたのです。ロースクールという迂回路を3年も回ってきましたが、結局彼を呼び戻したのはハーバフォードで学んだその愛する学問でした。しかし米国のアカデミアに戻る気はありませんでした。米国で哲学博士課程を進むことは、彼の目には、また1つの3年間の詰め込み暗記でしかなかったのです。修士から再び始めて、他人がすでに整理した知識をオウムのように繰り返す時間。スタンフォードで既に3年間も閉じ込められたと感じていた彼にとって、それは受け入れられないことでした。

彼が拒否したのは米国のアカデミアのある風潮でした。定められた手続きに従い、指導教授の機嫌をとり、学界が認める狭い道の中でのみ思考する方式。ロースクールのはしごに似たもう1つのはしごでした。カープはどんなはしごであれ毛嫌いしていました。彼が求めていたのは学位ではなく、自由な思考でした。正答が定まっていない問いを思いきり追究できる場所。そのような場所は米国にはないと彼は判断しました。少なくとも彼が耐えられる形では存在しなかったのです。

彼の視線は大西洋の向こう側に向きました。ドイツです。

カープはポスト戦争ドイツの思想に深く惹かれていました。彼が愛したヘーゲルもハイデッガーもドイツ人でした。自由な思考を求めて、彼は大西洋を渡ることに決めました。一流ロースクールの職を辞して、ドイツに哲学を学びに行くという決定。周囲の人々ほぼ全員がそれを狂気だと見なしました。立派なスタンフォード法学博士が安定した未来を捨てて、金にもならないドイツ哲学に向かって海を渡るとは。同期の目には、彼は正気ではありませんでした。

その決定を支持した人は1人だけでした。ピーター・ティールでした。

徹底した資本主義者だった彼が、金と無縁の道を選んだ友人を応援しました。退屈な大手ロースクールで成功することより、ドイツで哲学博士号を取得することの方が、カープにとってはるかに興味深い仕

事になるだろう、とティールは言いました。政治的には1ミリも譲歩しなかった2人でした。しかし人を見る眼では通じるところがありました。ティールはカプという人間の本質を見抜いていました。彼は信じられない仕事はできない人であり、信じた仕事なら海を渡ってでも追求する人だということを。カプが野生動物のように戦っていたその宿敵が、実は人生の分かれ道では唯一の支持者になってくれたのです。

スタンフォード・ロースクールはカプに弁護士という職業をもたらしませんでした。むしろ彼が死んでもしてはならないことが何であるかをはっきり教えてくれました。出世に向かう列に並ぶこと、信じていない仕事のための労働、みんなが行く道への同調。カプはそのすべてを拒否する自分をそこで確認しました。そして生涯の同志を得ました。失ったものと得たものを比べれば、彼が得たものの方がはるかに大きかったのです。

この章の青年はまだ私たちが知っているその人ではありません。1992年のアレックス・カプは、監視技術を売る会社のCEOではなく、マルクスの疎外された労働を叫びながら資本主義者の友人と野生動物のように戦っていた左派の哲学者でした。彼がのちに設立する会社が政府の情報機関にデータ分析ツールを納入することになろうとは、この時期の彼がそれを聞いたなら、嘲笑したに違いありません。ファシズムが来れば最初に銃殺される人だと自らを規定していた青年が、そのファシズムが手に握れば怖ろしくなるツールを作るようになる道は、まだずっと先のことです。この本が最後まで掴み続ける矛盾の種は、しかしすでにこの寮の部屋に蒔かれていました。群れをなして行く世界を憎んでいた人が、群れをなして行く軍隊のためのツールを作ることになります。その距離がどれほど遠いのか、そしてその距離を彼がどのように渡っていくのか、これからの話です。

船は東に向かいました。フランクフルトが彼を待っていました。批判理論の本拠地、フランクフルト学派の都市です。社会がどのように権力に馴染んでいくのか、人がどのように自分の思考を失ってしまうのかを生涯かけて問い続けてきた学者たちの都市でした。左派の哲学者にとって、これ以上相応しい目的地はありませんでした。そこで彼が誰を師匠として出会い、その出会いがどのようにずれていき、1人の左派哲学者がどのようにロンドンの資産運用家を経てシリコンバレーのCEOへと変身することになるのかは、次章の話です。確かなことは1つです。スタンフォード・ロースクールという3年間の獄期は、カプから弁護士の未来を奪う代わりに2つのものを残しました。自分が死んでもしてはならない人間であることについての明確な自覚。そして生涯共に戦い共に行く1人の友人。失ったものより得たものが大きかった獄期でした。

弁護士、前議員、AI政策研究者

kimkj.com

第3章 フランクフルトの社会理論家

溪谷の異端児

1992年、スタンフォード・ロースクールから法務博士 (J.D.) の学位を受けた一人の青年が、卒業式の衣装を脱ぎ、弁護士試験対策室の代わりに空港へ向かいました。行き先はドイツ・フランクフルトでした。アメリカの法曹界は彼を待っていました。大手法律事務所の初任給、正装、名刺、定められたキャリアの階段。彼はそのすべてを背に受けました。後に、カプはその決定を冷淡に要約しました。自分が信じない仕事をしながら、生涯を過ごすことはできないということでした。弁護士資格を手に握った人が弁護士になることを拒否し、飛行機のチケット一枚で大西洋を渡ったのです。

なぜフランクフルトだったのでしょうか。答えは一群の思想家たちにありました。20世紀初頭、この都市には批判理論 (Kritische Theorie) と呼ばれる学風が育ちました。資本主義と大衆文化、権威主義がいかにして人間の心を馴化するかを追求した学者たちの集団、フランクフルト学派 (Frankfurt School) です。テオドル・アドルノ、マックス・ホルクハイマー、ハーバート・マルクーゼなどの名前がその系譜にありました。

この学派には、痛ましい内歴がありました。1930年代、ナチスが権力を掌握すると、彼らのほとんどはユダヤ人であったため、ドイツを離れてアメリカに亡命しました。ファシズムがいかにして平凡な人々の心を捉えるかを生涯のテーマとした学者たちが、まさにそのファシズムに追われたのです。彼らは亡命地で権威主義的な人間類型を研究し、戦争が終わった後、一部がフランクフルトに戻りました。ユダヤ人混血として生まれ、ファシズムが来たら最初に銃殺されるのは自分だと信じながら育った青年が、まさにそのファシズムを生涯追求した亡命者たちの拠点を訪ねたのです。偶然とは見難い引力でした。

その伝統の生存者にして、当代最高の哲学者と称される人物がいました。ユルゲン・ハーバーマス (Jürgen Habermas) です。ハーバーマスは師の世代の悲観を受け継ぎながらも、そこからもう一歩進んだ人でした。人々が力や嘘によってではなく、より良い根拠に説得され、合意に至る対話、すなわち強制のない討論こそが民主主義の根源だと考えました。カプはその名前を見てドイツに行きました。

ロースクールを卒業して弁護士にならない人は稀です。さらに稀なのは、その職から哲学へ、それも海の向こうのドイツ語で転身することです。カプの履歴書を遠くから見ると、道が滑らかに見えます。1989年ハーバード学士号、1992年スタンフォード法務博士号、そしてドイツへ。しかし近くから見ると、その間のあちこちに断絶があります。法曹界という良く整備された高速道路を目前に、ハンドルを切って舗装されていない道に入った人の選択です。安定した道が彼を引き付けるほど、彼はますます遠く走り去ったのです。

カプがアメリカ哲学に抱いた不満は明確でした。彼の見方では、英米圏の哲学は言語を細かく分割して分析したり、デカルトが残した古い宿題、つまり見る私 (主体) と見える世界 (客体) がどのように出会うかという問題に閉じ込められて堂々巡りしていました。彼はそのような狭い部屋に息苦しさを感じました。代わりに、カントからヘーゲルへ、マルクスへ、そしてニクラス・ルーマン (Niklas Luhmann) とマルティン・ハイデッガー (Martin Heidegger) へと続く、ドイツ思想の大河の流れに惹かれました。人間を一つのまとまりとして、身体と心と社会を一度に思考しようとする哲学的人類学に魅了されました。小さなパズルを解く哲学ではなく、世界全体を問う哲学。それが彼が求めていたものでした。

フランクフルトに到着したカプは、ハーバーマスのコロキウム (Kolloquium、少数が集まり討論する大学院セミナー) に参加しました。最初の数年はドイツ語との戦いでした。母国語ではない言語でヘーゲルとカントを読み、その言語で自分の考えを述べ、再びその言語で巨匠たちの反論を受け止めなければなりませんでした。カプはその時間に耐えながら、ドイツ語と論文を一緒に磨き上げました。

コロキウムは生きた思想の格闘場でした。カプはハーバーマスとカール・オットー・アペル (Karl-Otto Apel) が対峙する論争を目の前で目撃しました。二人は友人であるとともに、生涯の論敵でした。真理とは何か、道德の根拠はどこにあるか、という問題をめぐって、二人の老哲学者は一步も退かずにつつかりました。もう一人の巨匠ニクラス・ルーマンとも一座に着きました。ルーマンはハーバーマスとは正反対の方向から社会を思考した人でした。アメリカから来た無名の留学生が、20世紀社会理論を支えた人々と同じテーブルで言葉を交わしました。カプはそこで一つのことを確認しました。自分がこれらの巨人たちと同じ部屋に座り、学問的論争を最後まで追跡することができるだけの知性を持っているという事実でした。どこでも本当のメンバーになることができないと感じながら育った人が、世界最高水準の知性たちの間で自分の場所を測った瞬間でした。

しかし、巨人のそばでの時間は、同時に幻滅も教えました。カプは、学界内部の論争が外の世界に与える影響が軽すぎるという点にますます疲れました。一学期全部を注ぎ込む激論も、講義室のドアを出た瞬間には何も変わりませんでした。脚注一つをめぐって数ヶ月争うが、その脚注が街のどの一人の人生も揺るがさないという事実。それが彼を蝕みました。彼は世界最高と呼ばれる学者たちの性格が、一緒に働くには非常に難しいということも知りました。頭脳は並外れていましたが、何かを実際に作り上げる人たちではありませんでした。カプの表現を借りるなら、彼らには「ビルダー (builder) 」の気質がありませんでした。テキストを読み、別のテキストで応酬する仕事には長けていましたが、その思想で現実の何かを構築することには関心がありませんでした。机の上で世界を分解することは知っていても、手で世界を組み立てることは知りませんでした。この間隙が、後にカプという人物を理解する鍵となるでしょう。

関係の終わりは一通の手紙で訪れました。2000年8月、ハーバーマスはカプにタイプライターで打った3ページの手紙を送りました。もはや指導教授を引き受けないという内容でした。伝えられるところでは、ハーバーマスはカプが扱うテーマについて、すでに錚々たる文学批評家や理論家たちが著述してきたため、カプが彼らと競うのは難しいだろうというような趣旨のことを述べたということです。巨匠が弟子に送った決別の通告でした。カプは後年、このことについて何度も語りました。拒絶された記憶は辛苦でしたが、彼はその苦さを自分の物語の一場面として受け入れました。(手紙の正確な文言と拒絶理由に関する詳細は、カプ本人の回想と報道機関の報道に依拠しており、第一次資料が公開されたものではありません。)

ここで、資料によって異なっていた一つの事実を正す必要があります。多くの文献がカプをハーバーマスの弟子と書いています。半分だけ正しい言葉です。カプがハーバーマスのコロキウムで数年間を過ごし、その影響下で研究したのは事実です。しかし、博士論文を最後まで導き、学位を取得させた実際の指導教授はハーバーマスではありませんでした。カロラ・ブレデ (Karola Brede) でした。ハーバーマスが手を引いた後、社会心理学者だったブレデがカプの論文を引き継ぎました。ですから、正確に言うと、こうなります。インスピレーションはハーバーマスから、指導はブレデから受けました。カプ自身も、ゲーテ大学のある部門からではなく、ハーバーマスが属する社会研究所 (Institut für Sozialforschung) とは異なる社会科学部門から学位を取得しました。

ブレデはハーバーマスとは異なる質の学者でした。ハーバーマスが巨大な言説と理性、コミュニケーションの普遍的構造を扱ったのに対し、ブレデは社会学にフロイトの精神分析をもたらし、心の具体的な作動を観察しました。彼女はゲーテ大学社会学科とジークムント・フロイト研究所 (Sigmund Freud Institute) の両方に籍を置いていました。一方の足は社会を見る学問に、もう一方の足は心を見る学問に掛かった人でした。この結合がカプに良く適合しました。

抽象の空だけを漂っていた青年に、ブレデは足を踏みしめる堅い地面を与えました。ハーバーマスのそばでカプは人類の普遍的理性を論じました。ブレデのそばで彼は一人の心の中で煮立つ衝動を扱いました。あまりにも大きくて手に握ることのできなかった問いが、一人の欲望と一つの時代の言語という具体的なサイズに縮小しました。大理論の代わりに、一つの具体的現象を徹底的に掘り下げ、一編の論文に完成させるよう導いた人が彼女でした。ビルダーになりたかった青年に、ブレデは少なくとも一編の論文であっても最後まで構築する方法を教えたわけです。

ブレデが観察したカプの姿には、興味深い場面が一つあります。彼女はカプにあえてドイツ語ではなく英語で論文を書いても良いと勧めました。外国人留学生にとっては大きな配慮でした。カプは断りました。自分が扱おうとする思考の質感を正確に捉えるには、ぜひともドイツ語でなければならないということでした。母国語で容易に進むことができる道を置いて、彼はより難しい外国語の道にこだわりました。正確さのためなら楽さを捨てる人。このこだわりは、彼が生涯示すだろう性向の小さな予告編でした。

ブレデはカプのもう一つの側面も記録しました。政治的に敏捷で、絶えず立場を変えながら論争していた青年の顔です。若きカプはドイツの自由主義政党である自由民主党 (FDP) に好意を持っていました。ところが、同じフランクフルトの街にキリスト教民主同盟 (CDU) に属するミシェル・フリードマン (Michel Friedman) が住んでいました。カプは彼を捕まえて、党を間違えて選んだと説得しようしました。路上で出会った政治家相手に、党を乗り換えろと主張する留学生。彼がどんな人物だったのか、この一場面が語っています。一つの陣営に固定されず、あちこちと移りながら論争そのものを楽しんだその柔軟さは、後に進歩主義者から安保現実主義者へと移行する彼の長い歩みと無関係ではなさそうです。

このようなハーバーマスの初期からの影響とブレデの実質的な指導の下で、カプは2002年、ついにゲーテ大学で新古典派社会理論 (neoclassical social theory) により博士号 (哲学) を取得しました。フランクフルト大学と一般的に呼ばれていますが、正式名称はヨハン・ヴォルフガング・ゲーテ大学 (Goethe University Frankfurt) です。学位は1989年にハーバードで学士号を、1992年にスタンフォードで法務博士号を、そして2002年にゲーテで博士号 (哲学) を取得しました。3つの学位が13年にわたってしっかりと積み重ねられたのです。弁護士になるところだった青年が社会理論家になるまで、まさにそれだけの時間がかかったのです。

論文のタイトルは長く複雑です。『生活世界における攻撃性：俗語、攻撃性、文化の関連性の記述を通じたパーソンズの攻撃性概念の拡張 (Aggression in der Lebenswelt: Die Erweiterung des Parsonsschen Konzepts der Aggression durch die Beschreibung des Zusammenhangs von Jargon, Aggression und Kultur) 』です。タイトルだけでは何を言っているのか分かりません。解説しましょう。

まず「生活世界」という言葉から見てみましょう。生活世界 (Lebenswelt) は、われわれが毎日、息をするように生きている日常の舞台を指すドイツ語の哲学用語です。出勤時の挨拶、食卓でのおしゃべり、会議室の冗談、酒の席での悪口。理論として分け隔てず、ただ生き抜く、その平凡な世界が生活世

界です。カプが投げかけた質問はここから出発します。人間の内に秘められた攻撃性が、まさにこの平凡な日常の舞台の上で、どのようにしてそっと許容され、正当化されるのか。それを可能にする通路は何か。彼の答えは言語でした。より正確には、俗語 (Jargon) でした。

論文の出発点には、アメリカの社会学者タルコット・パーソンズ (Talcott Parsons) がいます。パーソンズは、社会がどのようにして一つにまとまり、機能するのかを説明した偉大な理論家でした。彼の描写はこうです。新生児は本能と衝動の塊として生まれてきますが、成長するにつれて、母親の愛を得るために規則を学び、役割を受け入れます。生の衝動が社会が理解できる動機へと洗練されます。攻撃性さえもこのプロセスの中で馴致され、秩序の中へと入り込みます。社会化という滑らかなコンベヤーベルトが、粗野な人間を清潔な市民へと加工する、という描写です。

カプはこの描写が余りに清潔だと見なしました。パーソンズのモデルは社会がどのように統合されるのかはよく説明しましたが、フロイトが語った破壊的衝動の真の強度を過度に穏やかに削り落としたというのがカプの批判でした。人間の心の中には、社会の規則と直面する禁忌の欲望、口に出すことのできない暗い衝動が沸き立っています。パーソンズのコンベヤーベルトはこの沸き立つものを処理することができません。カプは、社会の規範と個人の禁止された欲望の間の衝突と緊張を理論の中に必ず組み込むべきだと主張しました。そうしなければ、社会は単に素直に従う個人を足し合わせた合計へと縮小してしまうというのです。人間を余りに良く描けば、人間の危険性を見落とすという警告でした。

パーソンズが残した隙間を埋めようとしてカプが引き連れてきた人物がテオドール・アドルノ (Theodor Adorno) でした。正確には、アドルノの著書『真正性の俗語 (The Jargon of Authenticity) 』です。アドルノは、現代人が喪失した繋がりや疎外を埋めるために、特定の俗語にしがみつくと見なしました。カプはこの思考をさらに一歩進めました。彼は問いました。論理も届かず、辻褄も合わない言葉が、どのようにして人々の間でそこまで熱狂的に広がるのか。

カプの答えは鋭いものです。俗語はそれを使う人に同時に二つのものをもたらします。一つは帰属の幻想です。同じ俗語を使う瞬間、私は『われわれの側』になり、本物になります。もう一つは免罪符です。俗語は外部の者と異邦人を押しのけて攻撃したいという暗い欲望を、あたかも正当であるかのようにパッケージします。同じ言葉で内を結束させ、外を攻撃するということです。人々は俗語を口にすることで、社会の規範を外見上は破らないながら、心の中に抑圧された攻撃性を合法的に解放します。罵詈雑言一つなく、襟首を掴むことなく、丁寧な言葉だけで他者を傷つける方法。それが俗語だということです。

ここで一度立ち止まり、カプの頭の中を覗いてみる価値があります。彼の幼少期を思い起こしてみましょう。ユダヤ人の父と黒人の母の間に生まれ、どのグループにも完全には属することができなかった少年。私たちは互いによく合っていると言うどのような集団も、自分自身を含まないと信じていた人。そのような人が博士論文で掘り下げたテーマが、まさに『われわれの側』を結束させ、『あちら側』を押しのける言語の作動方式だったのです。内と外を区別する言葉の暴力を生涯の外から受け続けた人が、その暴力の設計図を学問として描き出したわけですから。自分が傷つけられた刃を逆に握り、その刃を調べたということです。(この結びつきはカプ本人が明示したのではなく、彼の幼少期の発言と論文のテーマを繋ぎ合わせた解釈です。)

ここでカプはさらに一層を上積み重ねました。ヘルムート・プレスナー (Helmuth Plessner) の『遅れた国家 (The Belated Nation) 』です。プレスナーは問いました。なぜよりもよってドイツだったのか。ヨーロッパの真ん中で、なぜドイツはファシズムへとスリップしたのか。彼の説明はこうです。

ドイツは民主主義の制度が遅れて確立した国でした。イギリスやフランスが早期に市民の政治を育てた一方で、ドイツはその学校に遅く通いました。そこにマルティン・ルターの神学から流れ出た『世俗的敬虔さ』と深い『内面性』が加わりました。外部の政治よりも内部の魂をより支持する気質です。広場での議論よりも心の内への沈思を高潔であると見なす文化です。プレスナーは、正にこの土壌が権威主義とファシズムが芽生える社会的な盲点となったと見なしました。政治を下劣なものに見なした場所に、逆に政治的な蛮性が割って入った、という診断です。カプはこの診断が過去の事柄では終わらないと見なしました。非民主的で排除的な衝動が、いかに現在もドイツの生活世界の中で密かに力を得ているのか、彼はその作動を把握しようとしていました。

三人の名前が一つの論文の中でかみ合います。パーソンズから社会がいかに人間を馴致するかを借り、アドルノから言語がいかに暗闇をパッケージするかを借り、プレスナーからどのような土壌がその暗闇を育てるかを借りました。そこにフロイトが語った衝動の実際の力を再び吹き込みました。散在する四つの理論的系統を一つの問いの下でまとめ、一つの画面に展開して示したわけです。後日、彼が創設する会社が行う仕事、すなわち散在する情報の断片を一つの画面でまとめて示す、その仕事と、微妙に似通った作業でした。

理論だけでは論文は成立しません。カプは自分の枠組みを証明する実際の事件を論文に引き入れました。彼が学位論文を書いていた時代にドイツを揺さぶった事件でした。抽象的な理論を生きた現場の上に降ろす手腕がここで明らかになります。1998年10月、フランクフルトのパウルス教会 (Paulskirche) で、作家マルティン・ヴァルザー (Martin Walser) がドイツ書籍商平和賞を受賞しました。パウルス教会は空の建物ではありません。1848年にドイツ最初の国民議会が開催された場所であり、ドイツ民主主義の象徴とも言える場所でした。民主主義の聖堂で、ある作家が民主主義の外装を纏いつつ、その反対の衝動を放出したわけです。受賞スピーチでヴァルザーはホロコーストを繰り返し言及し、反省を求める知識人たちに対して刃を抜き出しました。彼はその終わりのない問い詰めを『残酷な記憶の意識』と呼び、自分はもはやそのような道德の銃口の前に立つて生きることはいくできないと宣言しました。客席には、当時ドイツ・ユダヤ人中央評議会の会長であったイグナツ・ブビスが座っていました。

カプの分析は冷徹で精密です。彼はヴァルザーの主張が歴史の前で明らかに誤った言い張りだと見なしました。しかし、その誤った言葉が生み出した効果は莫大だと指摘しました。ヴァルザーは『われわれの民族 (das Volk) 』という言葉をも自分のものとして引き寄せ、自分と聴衆を一つに結束させました。そして人々が心深くに抱いていながら、禁忌ゆえに口に出すことができなかったものを代わりに言ってくれました。ホロコーストへの疲労と、終わりなく有罪者扱いされることからの怒りでした。ヴァルザーの言語は典型的な真正性の俗語として機能しました。その言語の中で、加害者と被害者がそつと入れ替わりました。反省を求めている知識人とユダヤ人が、むしろ加害者へと変身しました。聴衆はヴァルザーの俗語を通じて、抑圧されていた攻撃性を解放し、心理的安堵を得ました。民主主義の外装をそのまま着たまま、他者への敵意を正当化する言語。カプはそれを自分の理論の完璧な実例とみなしました。一つの博士論文がその時代の熱い論争の真ん中に手を伸ばしたわけです。

論文を書いている間、カプはデスクに座りきりではありませんでした。彼はフランクフルトのジークムント・フロイト研究所 (Sigmund Freud Institute) で研究員として働いていました。精神分析の本拠地の一つでした。そこでの夜は講義室と異なっていました。カプは精神分析家たちの周りに座り込み、葉巻を吸いながら『意識的な無意識 (conscious subconscious) 』について夜通し議論しました。人間が自分自身さえも気づかぬうちに知っていること、知りながらも知らないふりをしていることについての話でした。分析家たちは患者がどのように考え、どのように行動するかについて果てしなく語り出

しました。カプはそのかたわらで聴きました。彼は人間本性の暗い内側、欺瞞と欲望と真の動機についての資料を、頭の中に着々と積み重ねていきました。

後にカプはこの時代を振り返って驚くべき評価を遺しました。フロイト研究所で人間の欺瞞と欲望と動機を間近に見た経験が、人生を通じてビジネスのために受けた唯一の貴重な教育だったということです。社会理論でもなく、法学でもありませんでした。精神分析家たちのタバコの煙が立ちこめる議論の場でした。人が何を望みながら望まないふりをするのか、どのように自分自身を欺くのかを読み取る眼。それが後にバランティアという企業で、扱いが難しいことで評判の天才エンジニアたちを動かし、結びつけるカプ式経営の基礎となったのです。人間の心を解剖していた学生が、人間の心を引き導く経営者となったのです。

博士号を取得する頃、カプはフランクフルトという都市に完全に溶け込んでいました。ドイツに渡った後2001年まで、彼はその都市に住んでいました。よそ者であった彼にとって、ドイツの文化的伝統が思いがけない安らぎの場となったのです。愛しているという言葉を手軽に撒き散らさず、同意しないときは同意しないとはっきり言う文化。うわべと見かけが少なくその率直さをカプは快適に感じました。どこにも完全に属することができなかった人が、初めて居場所を見つけたように見えました。彼は一時期、ドイツに永遠に根を下ろそうと考えたこともあったのです。

ドイツの率直さはカプの本性とよく合致しました。どこにも属することができないと感じながら育った人にとっては、見かけ上親切的なアメリカ式の社交よりも、むしろ正直な距離感が快適でした。同意しなければ同意しないと言う場では、少なくとも誰が本当に自分の味方で誰がそうでないかを混同することはありませんでした。人生を通じて所属を疑いながら生きてきた人にとって、その明晰さは安らぎでした。

貧しい時代でした。その貧困が生み出した逸話の一つが、彼のフランクフルト時代を凝縮して示しています。ある日、カプは同僚たちに冗談を言いました。アメリカのシャンプーがあまりにも強烈だったため、自分の髪がこのようにチリチリに痛んでしまったということです。だからそのシャンプーメーカーを相手に訴訟を起こして一稼ぎするつもりだと言いました。誰が聞いても荒唐無稽なことでした。ところがカプのボサボサの髪とオタク的な行動があまりにも説得力があったため、大学のかなりの知識人たちがそのとんでもない言葉を本気にしてしまいました。彼がどのような印象を残す人物だったのか、この一節がそれを物語っています。

ハーバーマスの拒否の手紙を思い出します。普通の留学生なら、その手紙で打ちのめされたであろうことです。当代最高の哲学者が手を引くと通知した瞬間、博士課程は終わったも同然に見えました。カプは打ちのめされませんでした。子どもの頃からどこにも完全に属することができないと信じていた人にとって、巨匠の拒否は馴染みのある経験の一つの変奏だったかもしれません。彼を受け入れない集団が一つ増えたに過ぎません。彼はブレデに移り、論文を最後まで押し進めました。拒否される場所で止まらず、別の道を切り開く、その習慣は、標準の道が塞がるたびに自分だけの道を発明してきた読字障害の少年のそれと同じ系統でした。

スタンフォードでイデオロギー論争に没頭していた左翼傾向の青年がいました。十年近いドイツ滞在を終えて出てきた人は、同じ人ではありませんでした。彼は人間の狂気と破壊性を間近に見た人となったのです。人がいかに容易く言語の詐術で自分の中の暴力を正当化するのか、上品な言葉の背後にどのような蛮行が隠れているのかを学問として掘り下げた人でした。その凝視の果てで、彼はある結論に近づきました。人間の善意や柔らかな言葉だけでは蛮行を止めることができないということでした。（こ

の変化の因果をカプ本人が明示的に整理したものではなく、彼の学問的経歴と後の発言を繋ぎ合わせた解釈です。)

言語と攻撃性と文化がどのように絡み合い、一つの社会の形を作り出すのか。カプが博士時代に投げかけたこの問いは、講義室では終わりませんでした。それは後に彼が技術と民主主義、そして西方世界の生存を思考する際に足下に敷かれた堅固な基盤となったのです。

その基盤の輪郭は、彼が2025年に出版した著書『技術共和国 (The Technological Republic) 』の中でかなり後になって姿を現します。そこでカプは政治学者サミュエル・ハンティントンの言葉を借りて、一つの冷徹な命題を投げかけます。西方文明が台頭したのは、彼らの思想や宗教がより優れていたからではなく、「組織化された暴力を振るう能力」が優れていたからだということです。バルザーの演説で上品な言葉の背後に隠された暴力を読み取った学生が、数十年後には暴力を正面から凝視し、それをどのように扱うべきかを問う人となっていたのです。

人間の心の奥底で暴力がどのように正当化されるのかを知っている人は、その暴力を何で止めるかを異なる形で問うようになります。柔らかな言葉では蛮行は止まらなると信じるようになった人の結論は、圧倒的な力で蛮行を抑圧しなければならないという方向に傾きました。迫害の第1の的になることを恐れながら育った人が、その恐怖の果てで誰よりも堅固な盾を作ることにしたのです。この結論が正しかったかどうかは、この本が最後まで追求すべき問いです。フランクフルトで攻撃性を解剖していたその青年が何を創造することになるのかは、一本の電話が彼にかかってくる次の章で形をなします。

弁護士、前国会議員、AI政策研究者

kimkj.com

第4章 哲学者から億万長者CEOへ

シリコンバレーの異端児

電話が鳴ったとき、アレックス・カーブはロンドンにいました。2003年のあるとき、それです。受話器の向こうの声は、スタンフォード・ロースクール時代に同じ寮の廊下を過ごした古い友人、ピーター・ティールでした。二人は夜通し政治と哲学について論争する仲でした。左派傾向のカーブと自由至上主義者のティール。互いに一步も譲らず、その論争を楽しんで夜明けまで席を立たないような間柄でした。二人はほぼすべてのことで意見が異なりました。市場の見方も、国家の見方も、人間の本性の見方も異なりました。それでも二人は互いに耐えました。いや、耐えたというより、互いの頭を砥石とし自分の思想を磨きました。

ティールは新しいソフトウェア会社と一緒に立ち上げようと言いました。共同創業者になり、CEO職を引き受けろと言ったのです。

カーブはコード一行も書くことができませんでした。コンピュータ科学を学んだことがなく、正式に経営学の授業を受けたこともありませんでした。彼が持っていたのは、ドイツのゲーテ大学から受けた社会理論の博士号と、ロンドンで他人の金を運用しながら身につけた感覚だけでした。最先端の軍事ソフトウェア会社の社長職に就く経歴ではありませんでした。社長どころか、面接での第一問目で詰まる経歴でした。オペレーティングシステムが何であるか、データベースがどのように動作するか、彼は説明することができませんでした。

それでもカーブはその場でイエスと言いました。給料がいくらか、持分をどれだけ受け取るか、会社が何を製造するかさえ、詳しく聞きませんでした。電話の上で即座に受け入れました。本人の回想によればそうだったとのことです。条件を吟味せず飛び込んだこの場面は、その後カーブが様々なインタビューで好んで語る話になります。事実であれ、事実に劇的な色を付けたものであれ、一つは明かです。この日の通話で、哲学者の道を歩んでいた一人の男の人生が方向を変えたのです。

二人の縁を知るには1990年代初頭のスタンフォードに少し戻る必要があります。カーブとティールはロースクール時代の同級生でした。同じ建物で過ごし、政治と哲学で衝突しました。カーブは左派で、ティールはその時すでに自由至上主義の色が濃かったです。通常そのような二人は互いを避けます。二人は反対でした。自分と最も異なる頭を持つ相手と衝突することから、二人とも快感を感じました。その時代の論争が十数年後、一つの会社の基盤になります。CEOと会長が政治的に正反対の会社。その奇妙な組み合わせの根がロースクールの廊下にあります。

その電話を受けるまで、カーブがどこで何をしていたかをまず確認する必要があります。

2002年、カーブはフランクフルトのゲーテ大学から博士号を取得しました。指導教授はカロラ・ブレデーで、その上にはユルゲン・ハーバーマスという巨大な名前がありました。ハーバーマスのコロキウムに出入りし、ニクラス・ルーマンとカール・オットー・アベルといった学者たちと交わりました。彼が扱った社会理論は、世界中で30人、多くても40人くらいしか正しく理解できるかどうか思われるほどの領域でした。

その頂点で、カーブは一つのことに気づきました。自分が地球上で最も多く学んだグループに属しながら、同時に最もお金を稼げないグループにも属しているという事実でした。二つの極端が一人の人間に重なっていました。より深い幻滅は別にありました。学界の論争はその中の人々にとってだけ面白く、

外の世界にはほぼ何も変わらないということでした。賭け金が小さすぎました。一つの論文をめぐって何年も争っても、その争いが外の一人の人生さえも変わらなかったのです。世界トップレベルの哲学者たちをそばで見てきたカーブは、彼らに何かを実際に創造する手がないことにも気づきました。言葉は鋭かったが、建設する人ではありませんでした。彼らは世界を解釈し、建設しませんでした。

後日、カーブはビジネスが学界より真実に近いと言います。粗い言葉で言い換えると、こういうことです。学界は何の影響も及ぼさないのに世界が自分の言葉を聞かないと怒るだけの人々の集まりで、ビジネスはあなたが作った製品がそれが本当だということを証明しなければ生き残れない場所だということです。製品が即証明です。売れなければ間違っています。

逆に見ると奇妙な主張です。真実を扱う学問より、金を扱う商売が真実に近いとは。しかしカーブの論理はこうです。哲学セミナーでは、誰も自分の言葉が間違っていることを認める必要がありません。言葉は言葉で受け返すことができ、議論は永遠に続きます。市場は異なります。市場では顧客が財布を開くか開かないかで答えます。間違った製品は売れず、売れなければ会社は死にます。検証は容赦ありません。カーブはその容赦なさに魅力を感じました。生涯どこにも完全に属さなかった人にとって、言葉の権威ではなく結果で判断される世界は、むしろ公平に見えました。

学界を離れたカーブの手に握られていた元手は、曾祖父から受け継いだ12,000ドルでした。カーブ本人の言葉です。彼はこのお金で株とスタートアップに手を出し、意外とお金を稼ぐのに才能があることを発見したと言っています。その成功を足がかりにロンドンで資産運用会社を設立したと彼は言っています。会社名はキャドマン・グループでした。自分の真ん中の名前アレクサンダー・キャドマン・カーブから取ったものです。キャドマンは6世紀イングランドのウィットビー修道院の羊飼いであった後、最初の英語詩を残したと伝えられる修道士の名前でもあります。

ここでカーブの自己叙述と検証された記録との間の隙間を正直に開いておく必要があります。カーブは当時自分の目標が素朴だったと回想しています。25万ドルくらい、うまくいけば100万ドルくらい貯めてベルリンに戻り、アマチュア評論家のように本を読んで文を書き、ハンバーガーを食べて放蕩的に生きることが人生の唯一の目標だったというものです。謙虚なようでありながらも劇的な自己描写です。

ただし、12,000ドルという少ない元手で、ヨーロッパの富豪を引き寄せるロンドンの資産運用会社をいっきに設立したのかについては、ウィキペディアを含む記録もきちんと説明できていません。12,000ドルは資産運用会社を運営するには極めて小さなお金です。そのお金で直ちに大口顧客の資金を運用したという話には、抜け落ちたステップがあります。英国企業登録情報を追跡したあるオンライン調査によると、キャドマン・グループの公式法人設立時点は2005年と示されています。ティールがカーブにパランティア共同創業を提案した2003年から2004年より、むしろ遅いが重なっています。この登録年と調査内容は非公式追跡記録に基づいているため、さらなる確認が必要です。同じ調査は、キャドマン・グループに名を連ねた人物の中のいくつかが現在パランティアの中核職にあると指摘しています。事実であれば、キャドマンは独立した巨大運用会社というより、カーブの初期投資と人脈がパランティアへ流れ込む通路に近かったかもしれません。ただしこれもまた追跡記録に拠った解釈なので、断定しません。それでも一つは明確にしておく価値があります。カーブが語るキャドマンの話は、本人の口を通じた自己叙述であり、その華やかな成功談がすなわち検証された事実ではないということです。カーブは自分の経歴を劇的に述べる癖があります。その癖を考慮して聞く必要があります。

ロンドンでお金を運用していたこの時期、カーブはティールと再び親密になりました。ティールは2002年ペイパルをeBayに売却して莫大なお金を手にし、その資金でクラリウム・キャピタルというヘッ

ジフアンド兼ベンチャーキャピタルを運営していました。カープはヨーロッパで築いた金融人脈を活かしてティールを助け、クラリウムの投資資金を集める仕事を手伝いました。ロースクール寮で政治と哲学で衝突していた二人が、今はお金を間に置いてもう一度手を握りました。一方は資金を運用し、一方はその資金に対応するヨーロッパの大口顧客を連れてきました。二人の政治的姿勢は正反対でしたが、その違いがむしろ会話を鋭くしました。カープは左派で、ティールは自由至上主義者でした。ところが事業においては、その間隙は欠点ではなく長所でした。互いに盲点を補い合ったからです。

カープがロンドンで身につけたのは、財務諸表を読む技術ではありませんでした。

彼が発見した自分の本当の才能は、人間を扱うことにありました。本人の言葉を借りれば、こうです。自分はお金を稼ぐことには才能があったが、正当な対価を受け取ることには不器用だったと言いました。だから自分のように学究的で、お金はよく稼ぐが正当な値を得られない変わった人々を探し回ったのだとします。彼らにビジネスを組み立てる方法を教え、より速く稼ぎ、公正に対価を受け取るようにしたということです。

才能は優れているが社交性に欠ける変わった天才たち。彼らの才能を現実のお金に変え、同時に彼らを一つの場所に止めておく能力。カープが持っていたのはそれでした。ティールはまさにこの能力に気づきました。

ティールの頭の中には既に一つの構想がありました。ペイパルでサイバー詐欺を摘発していた方法を、今度はテロリストを追跡するのに使ってみようということでした。ペイパル時代、ティールと彼の同僚たちは、偽の口座と盗まれたカードで金を盗む詐欺師たちと果てしなく戦いました。人が一件一件摘発することはできない量でした。そこで彼らは疑わしい取引のパターンを機械が抽出させました。人と機械が一緒に見る方法でした。ティールはその発想を別の戦場に移すことができると考えました。9・11がその背景でした。2001年9月のあの朝以来、アメリカの情報機関は、散在するデータの山の中から脅威の信号を抽出する必要があるという課題を担わされました。テロは非対称の脅威です。乾草の山は巨大で、針は小さいです。既存の方法ではその針を見つけることはできませんでした。データは豊富でしたが、そのデータは数十の機関に、数百のコンパートメントに別々にロックされていました。9・11以後の調査で明らかになった痛い事実がそれでした。手がかりはすでにありました。ただ、一つの場所に集まらなかっただけです。

この構想を現実に変える会社の社長として、ティールはカープを指名しました。コードを書けない哲学者を軍事ソフトウェア会社の顔として立てるという発想は奇抜に見えます。しかし、ティールの計算は周密でした。

閉鎖的で保守的なワシントンの官僚たちに新しいソフトウェアを売るには、ありふれたスーツ姿の営業マンではいけないというのがティールの判断でした。彼が持つ営業哲学は逆説的でした。何かを売るには相手があなたを信じるほどは彼らに似ていなければならないが、同時に彼らにはない何かをあなたが持っている信じさせるほどには完全に異なっていなければならないということでした。あまりに似すぎれば、ただもう一人の業者に過ぎません。あまりに異なれば、気のふれた人扱いされます。その間の狭い場所に正確に立つ人が物を売れるのです。ロンドンでヨーロッパのエリートの資金を動かし、ドイツ語で書かれた難解な博士論文を持つカープは、硬化した官僚たちに自分たちが測ることができない未知の天才性を刻み込むのにふさわしい人物でした。正装を着た防衛産業の幹部が入ってくると、官僚たちはその人の計算を知っています。何を売りに来たのか、どう値引きすべきかが透けて見えます。ところがヘーゲルとハーバーマスを口にする、乱れた髪にジャージ姿のこの人の前では、計算が通用しませ

んでした。測ることができない相手でした。その測ることができなさがカプの武器でした。

ここで区別しておくべき点があります。カプ個人がコードを書けないという事実と、この会社がなぜ設立されたのかは別の話です。カプの無能は個人の限界であり、パランティアの設立動機は9・11以後の対テロという時代の課題でした。両者を一緒にして、コーディングもできない人がどうして社長になったのかという読み方をすると、この会社が何を解決しようとして生まれたのかを見落とします。

パランティアは2003年に設立されました。正式な運営は2004年から始まり、カプは2004年に共同創業者兼CEOとして就任しました。

五人が創業者でした。ピーター・ティール、アレックス・カプ、ジョー・ロンズデール、スティーブン・コーエン、ネイサン・ゲッティングス。ゲッティングスはPayPal出身のエンジニアであり、ロンズデールとコーエンはスタンフォードから来た若い人物でした。コーエンは会社の初期製品を書いた中核エンジニアであり、ロンズデールはPayPalでインターンとして働きながらティールの目に留まった人物です。五人のうち四人はコードを知っていました。カプだけが知りませんでした。彼はこの中でコードから最も遠い人であり、同時に会社の顔になる人でした。構築の仕事は四人が担当し、販売と指導の仕事はカプが担当する構図でした。

会社の名前はトルキンの小説『指輪物語』から取ったものです。作中に登場する遠視の玉、パランティアです。遠く離れた場所の事柄を見る石です。創業者たちは、自分たちのソフトウェアが世界の隠れた脅威を看破するレンズになることを望んでいました。

初期にこの会社を救ったのはシリコンバレーのベンチャーキャピタルではありませんでした。政府を相手にするソフトウェア事業は儲からないか頭痛のタネだと考えた投資家たちが相次いで身を引きました。その空白を埋めたのはCIAでした。正確には、CIAが直接設立した会社ではなく、CIAのベンチャー投資部門であるInQTelが初期投資家として参入しました。この区別は重要です。パランティアは情報機関が作った会社ではなく、情報機関の投資子会社が早期に資金を提供した民間企業でした。

InQTelが投入した資金は200万ドル程度でした。ベンチャー投資の世界では大きな額ではありませんでした。しかし、その投資の真の価値は金額ではありませんでした。パランティアが米国のトップクラスの情報機関の実際のデータに触れながら、自社ソフトウェアをテストできるようになったという点にありました。金よりも門が開かれたことです。InQTelはFBI、CIA、そして国防内部の極秘部署の3か所で試験的なプロジェクトを開いてくれました。その中でも国防内部との協業が、会社が足がかりをつけるのに大きな力になりました。当時、米軍はアフガニスタンとイラクで即席爆発装置（IED）がどこに埋もれているのかを知ることができず、苦勞していました。路脇の土の山一つ、放置された車一台が爆弾である可能性がありました。兵士たちがその道を通るたびに命がけでした。どの地域で誰が材料を買い集め、誰がその道筋をよく出入りしていたかを知ることができれば、パターンが見えるはずでした。その情報は分散していました。偵察報告書は別、盗聴記録は別、現地情報は別でした。複数の機関に分断されたデータを一つにまとめると、その手がかりが見え始めました。

コードを書けない人がどのようにしてコードで回っている会社を率いたのでしょうか。

答えはカプが哲学から得た一つの洞察にあります。それを理解するには、まず一つの言葉を習得する必要があります。オントロジー（ontology）です。

哲学においてオントロジーは存在論を意味します。何が存在するのか、それらがどのような関係で結ばれているのかを問う学問です。難しく見えますが、パランティアの内部でこの言葉がなす役割は目に

見える形で理解できます。

こう想像すればいいのです。ある部署のコンピュータには電話番号リストがあります。別の部署には車両ナンバープレート記録があります。また別の場所には銀行取引履歴があり、その隣には出入国記録が別に置かれています。それぞれが自分の区画に閉じ込められたまま、互いに知り合っていない。どの電話番号の所有者がどの車を運転し、どの口座にお金を送り、いつ国境を越えたのかは、誰も一目で見ることができません。これらの断片が別々に散らばっているからです。

オントロジーがなす役割は、この散らばった断片を一つの画面に串刺しにして示すことです。電話番号を人と結び、人を車と結び、車を取引履歴と結びます。データの区画の数字が、現実世界の実体とその間の関係へと再び織り込まれます。分析官は一つの名前を押すと、その人を取り巻く関係のネットワークを一目で展開することができます。そのネットワークを織る設計図がオントロジーです。

場面として描くところです。分析官の前の画面が点灯します。中央の点一つが一人の人を示しています。その点を押すと線が伸び出ます。一本の線は電話番号へ、一本の線は自動車へ、一本の線は彼がよく送金した口座へとつながります。その口座の点を再度押すと、別の人が現れ、その人は数日前に国境を越えた記録を持っています。昨日まで五つの部署に別々に閉じ込められていた事実が、今は一つの画面の上で互いに手をつなんでいます。分析官はマウス一つでその関係をたどります。これがオントロジーが敷かれたソフトウェアの風景です。データを構造化するという言葉は理屈で理解しなければなりませんが、点と線が生き生きと動く此の画面は、ただ眼に見えます。

カプは哲学とコーディングの間に驚くほど似た側面があることに気づきました。彼の説明を解くところです。哲学は俗世間の基準では無用に見えますが、調べてみると決定的である、微細な区分を扱う学問です。この言葉とあの言葉がどう違うのか、この概念とあの概念の境界はどこなのかを際限なく区別します。コーディングも同じです。小さく見えますが世界に大きな影響を与える技術的な区別を扱います。このデータとあのデータをどう分け、どう結ぶかの問題です。

複雑な概念の微細な違いに耐え、それを支配する頭を持つ人であれば、多数のコードとデータが噛み合っ
て動く構造も支配できるというのがカプの持論でした。彼は直接コードを書きませんでした。その代わり、データがどのように結ばれ、解釈されるべきか、そのプロセスにおいて人々の権利がどのように守られるべきかをソフトウェアの深い骨組みに刻み込むよう方向を定めました。彼はエンジニアではなく、設計の哲学を定める人でした。何のためにこの道具を作るのか、何は絶対にしてはいけないのか。その質問に答える立場に彼が立っていました。

まさにこの場で、カプが哲学者として執拗にこだわったものが明らかになります。市民の自由をソフトウェアの中に技術として組み込むことでした。

9・11以後、テロ犯を捕まえるという口実の下で国家が市民のデータをかまわず掻き集める流れに、カプは深く不安を感じていました。彼の信念ははっきりしていました。テロとの戦争に勝つために民主主義の価値と市民の自由を損なえば、その戦争は勝っても負けだという信念でした。幼い頃、ファシズムが来たら最初に壁に立てられるのは自分だろうと思っていた少年の恐怖が、ここで設計原則の姿に変わります。

そこで彼はソフトウェアに二つのことを釘付けにしました。

一つは検索方式でした。万人に対して網を投げるようにデータを調べる方式を放棄し、法的根拠のある正確な対象だけを調べる方式を採用しました。無差別に掻くのではなく、理由が明確な標的だけを狙

うのです。これを述部ベースの検索 (predicate-based search) と呼びます。簡単に言えば、こうです。都市全体の通話記録全部を見るのではなく、令状に書かれたその一人の番号だけを照会するのです。調べる理由がまずあってこそ調べることができるように結んでおいたのです。理由のない網は最初から仕切りに引っかかって逃げられません。

もう一つは記録でした。誰がいつどのデータを見たのか、その全ての足跡を消すことのできない記録 (immutable logs) として残すようにしました。シリアライゼーションと逆シリアライゼーション、分岐とパイプラインのような複雑な骨組みがその記録を支えています。難しい言葉ですが、結果は簡潔です。誰かが市民の権利を侵害しようとするれば、その行為自体がシステムに証拠として残ります。議会が、弁護士がその記録を引き出して詰問することができます。

カプはパランティアの製品が世界で人権抑圧に使うのが最も難しいソフトウェアだと自負していました。紙に書かれた倫理綱領は破けば終わりです。しかし、コードに組み込まれた規則は破くことができません。自分の信念を綱領ではなく骨組みにしたというのが彼の主張でした。

この自負をそのまま受け入れる前に、影の側面も同じ重さで見する必要があります。監視ツールを作った人がそのツールは無造作に使えないように設計したと言っています。しかし、ツールはツールです。誰がそれを握るかによって、その骨組みがどれほど耐えられるかは別問題です。消せない記録も、その記録を見る意思のない権力の前では無力である可能性があります。カプの設計が真摯だったことと、その設計がすべての悪用を防いだということは別の話です。この本はその間隙を埋めず、そのままにしておきます。

経営においても、カプはシリコンバレーの定められた脚本に従いませんでした。

彼は会社を芸術家のコミュニティのように作り上げました。官僚的統制と階級制度が優秀なエンジニアの創造性を押しつぶしていると考えたからです。世界の規範にうまく適応できないものの、生まれながらの才能を持つ人々、神経多様性を持つ人々、そして異端児たちを集めました。彼らが自分たちが最も得意とすることに病的に没頭できる環境を整えてあげたのです。採用面接で彼が見ようとしていたのは学歴や経歴ではありませんでした。その人が一つの問題に夢中になれる人間かどうか、それが問題だったのです。扱いにくい天才たちが集まったコミュニティ。カープはそう企業を定義しました。難読症を抱えて育った人間が、標準から外れた脳が標準が見えないものを見ると信じていた、そういう人間が、自分と同じような人々のための場所を作ったのです。第1章のあの部外者が、今度は部外者たちを集めて企業を作ったわけです。

このような企業はそれまでなかったのです。シリコンバレーのスタートアップは通常、消費者を対象としていました。より速い検索、より便利なショッピング、より楽しいアプリが目標でした。パランティアの最初の顧客は消費者ではなく、情報機関でした。作る人たちも、買う人たちも、使う場所も、すべてずれていたのです。ジーンズを着たエンジニアたちが作ったものを、スーツを着た官僚たちが買って、戦地の兵士たちが使いました。その三つの世界はお互いをほとんど知りません。カープはその三つを結ぶ翻訳者の役割を果たしました。

初期の光景は滑稽でした。カープと、12歳の少年に見える風変わりなエンジニアたちの一団がワシントンの官僚たちを訪ねました。数十億ドルの予算でも解けなかったテロ対策分析の問題を、自分たちのソフトウェアで解けると言ったのです。官僚たちはこの一団をフランケンシュタインの怪物のように見ました。どこから転がり込んできた怪物たちなのか分かりませんでした。

その疑いを払拭したのはカープでした。背広姿の営業マンではなく、ドイツ語で社会理論を書く哲学者が紡ぎ出す説得でした。彼は機能を列挙しませんでした。その代わりに問いを投げかけたのです。あなたたちが持つデータはすでに十分です。問題はそのデータが互いに出会わないということです。その出会いを妨げる仕切りを私たちが取り除きます。官僚たちが一生の間に聞いた営業トークとは違う質感でした。ティールが狙ったあの逆説が作動した瞬間だったのです。彼らに似ていながら、彼らが持たない何かを持つ人間。カープはまさにその場所にびたりと収まったのです。

ここで美化の誘惑に警戒しなければなりません。コードが書けない哲学者がワシントンを魅了したという話は英雄譚として転がっていきやすいのです。しかし、その説得の先に何があったのかを一緒に見なければなりません。カープが売ったのは脅威を見通すレンズでした。そのレンズは人間を照らします。誰が誰と結びついているかを一つの画面に展開する力は、テロリストを捕まえるのにも使え、一般市民を覗き見するのにも使えるのです。カープ自身がそれ以上に誰よりもその両面を知っていました。市民の自由をコードに組み込もうと試みたのもそのためです。その努力が真摯であったことと、その道具が危険であることは、どちらも事実なのです。どちらか一方を消すと、カープという人間を見失うのです。

祖父から12,000ドルで始めたという一人の男が、ロンドンのファンドマネージャーを経て、世界で折り目の秘密めいた強力なデータ会社の長になりました。12,000ドルで始めて、後にはその数万倍を年収として受け取るCEOになり、数千億ドル規模の企業を率いる人間になったのです。起業当初の額が本人の言った通りなのかは確実ではありません。しかし、たどり着いた場所は明白です。

2003年の一本の電話がその出発点でした。コードが書けない哲学者が条件も問わずにイエスと答えたその瞬間、学界の部外者だった人間は、監視とデータ分析という、21世紀の最も重く危険な事業の真只中へ歩み入ったのです。

ファシズムが訪れたら真っ先に殺されるだろうと自らを規定していた者が、そのファシズムが握ったら誰よりも恐ろしくなるであろう道具を作る仕事を引き受けたのです。彼はその道具に市民の自由を守る錠をかけたと言います。その錠がどの程度堅牢なのかは、誰が扉の前に立つかによって左右されるでしょう。その答えはまだ出ていないのです。

哲学を去った人間は、哲学を捨てませんでした。講義室の代わりにコードの中に自分の思想を刻み込んだのです。本で30人を説得していた人間が、ソフトウェアで一つの国の情報機関を動かすようになったのです。賭金が小さいと言って学界を去った人間にとって、今や賭金は人命と市民の自由だったのです。それは彼が望んでいた重さでした。その重さに耐える資格が彼に備わっていたのかどうかは、後に続く章たちが明かしていく物語なのです。

弁護士、前国会議員、AI政策研究者

kimkj.com

第5章 自由民主主義の盾

溪谷の異端児

2022年春のある日、キーウのある建物の中にアメリカ人が足を踏み入れました。空港を通じた正式な入国ではありませんでした。ロシア戦車が首都の外郭30キロメートルまで進軍した直後で、西側の実業家たちはウクライナから脱出している途中だったのです。その流れに逆らって、アレックス・カップは中へと歩み入りました。彼はくせのある髪をしており、ゆるい服装をしていました。いつもどおり格式とは無縁の格好でした。向かい合った相手はボロディミル・ゼレンスキー大統領でした。西側の主要テクノロジー企業の最高経営責任者の中で、戦地のキーウを直接訪れた最初の人物がカップでした。

その席での取引の形式は慈善でした。パランティアは自社のソフトウェアをウクライナ軍に無償で提供しました。企業が掲げた大義は明確でした。ダビデがゴリアテに立ち向かえるように助けるということでした。しかし、無料で渡されたソフトウェアが実際の戦場で何をしているのかを見れば、「慈善」という言葉だけではその場面のすべてが説明されません。アメリカの一企業が別の国の戦争に入り込み、誰を殺すべきかを見分ける機械を動かし始めたのです。

その機械が何をするのかから見ていきましょう。戦場は情報に満ちています。上空には衛星が写真を撮り、ドローンが映像を送信し、地上ではレーダーが信号をキャッチします。無線が傍受され、哨兵の報告が上がり、敵が使っていた携帯電話番号が奪取されます。問題は、これらの断片が別々に散らばっているということです。衛星写真はある部門に、傍受記録は別の部門に、偵察報告はまた別の机の上にあります。誰かがこれらの断片を手で組み合わせるまで、それらはただのデータの山に過ぎません。

パランティアのソフトウェアが行うことは、散らばった断片を一つの画面に繋いで見せることです。企業はこれを「宇宙から泥まで (from space to mud) 」一枚の地図に載せると表現しています。衛星が見たものと地上の哨兵が見たものが同じ画面に重なり合います。敵が使っていた電話番号が、数日前に攻撃が起きた場所と、昨日撮影された車両の動きと繋がります。散らばっていた時には見えなかったパターンが、一箇所に集まる瞬間に浮かび上がります。誰が爆弾を埋めるのか、どの村が攻撃を責任を負うのか、敵の補給線がどこを通るのか、そのようにして明らかになります。

イラクのシンジャル地域で起きたことがその作動方式をよく示しています。パランティアの分析は膨大なデータを調べた末に一つのパターンを見つけ出しました。その地域で起きた攻撃と資金調達のほとんどを、ある村に住む特定の集団が責任を持っていたということでした。人間の目では半月眺めても見えない繋がりを、機械は画面の上に線で描いて見せました。

ウクライナでは、この作業の規模と速度が一段階上がりました。パランティアは衛星データを分析する「メタコンステレーション (MetaConstellation) 」システムに大規模言語モデルを組み合わせました。衛星、通信、機密筋からの情報が一つに溶け込み、妨害が渦巻いて通信が途絶える過酷な戦場でもシステムは動作しました。ウクライナ軍はこのシステムを使用することで、ターゲティング比率を20倍を超える水準まで引き上げたと評価されています。『タイム』はウクライナをAI戦争の実験室と呼びました。表現は上品ですが、その実験室で実験されるのは、人をより効率的に見つけ出して打撃を加える方法でした。パランティアの要員がウクライナ軍と一緒に戦場に配置され、直接技術を支援したという記録も残っています。

ここで一つはっきりさせておくべきことがあります。ウクライナにソフトウェアを無料で与えた決定を、純粋な善意だけで読むことは難しいのです。パランティアにとっては、自社製品が実際の現代戦で

どのような力を発揮するのかを、世界中の軍隊と政府の前に生中継で証明する舞台でもありました。広告では買えない信頼がそこで作られました。慈善と営業が同じ決定の中に重なり合っていました。どちらか一方だけが真実だと言うことは難しいのです。

パランティアが最初から戦争のために作られた企業だったという事実を、カップは隠しません。むしろ自慢しています。企業は2001年の9月11日テロの後、西側の市民的自由を損なうことなくテロと戦う技術を作ることを使命として2003年に設立されました（正式な営業は2004年）。カップはこの任務をトールキンの『指輪物語』に例えて、シャイアを救うこと（saving the Shire）と表現しました。平和な小さな村を守るために、誰かは暗黒に向かって入っていかなければならないという話です。

国家安全保障のために作られた中核ソフトウェアの名前がゴッサム（Gotham）であることも偶然ではないでしょう。ゴッサムはバットマンが守る都市、暗黒と犯罪が満ちあふれた場所の名前です。隠れた悪党たちの網を見つけ出して一掃するという世界観が、その名前の中に込められています。（この名前の解釈は企業が公式に明かしたものというより、製品の性質と名前を繋ぎ合わせた解釈に近いものです。）

初期成長の決定的な足がかりはアメリカ中央情報局でした。CIAが直接企業を設立したわけではありません。CIAのベンチャー投資部門であるイン・キュー・テル（In-Q-Tel）が約200万ドルを投資したことが始まりでした。このお金より重要だったのは、そのお金に付き添ってきた機会でした。パランティアはイン・キュー・テルの投資を足がかりに、FBI、CIA、国防省の機密部門の3つの場所で実際のデータを扱いながら試験プロジェクトを進めることができるようになりました。たった今作られたばかりの小さな企業がアメリカの情報機関の深い資料を手握ったということです。

イラクとアフガニスタンでアメリカ軍が長く悩まされていた問題が即席爆発物、つまり路上に埋められた爆弾でした。どこに埋まっているのかわかりませんでした。パランティアのソフトウェアは複数の機関に散らばった断片を集めました。指紋スキャン、奪取した携帯電話番号、情報提供者の報告、過去の攻撃が起きた場所。これらを一つに結びつけると、安全な移動経路が見え、爆弾を作る者たちの輪郭がつかめました。兵士が家に帰ってくる確率が上がりました。カップがこの仕事に付与する意味がまさにここにあります。危険を冒す軍人を安全に送り届けること、それが企業の崇高な責任だということです。

2011年にネイビーシールズがオサマ・ビン・ラディンを追跡して殺害した時、パランティアのソフトウェアが決定的な役割を果たしたという噂が流れました。カップは肯定も否定もしませんでした。代わりにこう言いました。教皇に会った時に教皇が言ったことを吹聴する評判を持つと、二度と教皇に会えなくなる。情報機関との関係が沈黙の上に成り立っていることを、彼は沈黙で誇示しました。

戦場の仕事だけがあつたわけではありません。パランティアはカナダの研究機関シティズン・ラボ（Citizen Lab）と手を組んで、ダライ・ラマの内部ネットワークがある外国政府の巨大なサイバーネットワークにハッキングされていたという事実を明かしました。データを繋ぐ同じ技術が、今回は監視される側を守るために使われたわけです。企業が自らのアイデンティティを説明する際に好んで引き出すエピソードでもあります。

2021年8月、アメリカ軍がアフガニスタンから撤退する際のカブール空港の混乱もそのリストに入ります。国防省の緊急の呼び出しを受けたパランティアは、数日のうちに軍隊と民間機関のデータの一つに結び合わせるシステムを構築しました。17日間で約12万5千人がその空港から脱出しました。散らばった名簿と位置と日程を一つの画面に集める作業、つまり戦場で敵を見つけ出していたその技術が、人々

を避難させるために使われた場面でした。

パランティアが防衛産業の中心に入っていく入口には、別の企業が空けた席がありました。2018年、グーグルの従業員たちが立ち上がりました。人工知能を軍事的な殺傷に使う仕事に手を貸すことはできないとして、従業員たちは国防省の「プロジェクト・メイブン (Project Maven) 」から企業が手を引くよう要求しました。グーグルは従業員たちの味方をして撤退しました。

パランティアがその席に立つことができたのには、その前に行った一つの戦いもありました。アメリカの兵器調達市場は長年の慣習に縛られていました。実績が証明されていない大規模防衛産業企業が3万ページのパワーポイントを持ってきて契約を勝ち取る構造でした。パランティアはこの慣習を破ろうと2016年にアメリカ陸軍に対して前例のない訴訟を起こし、二度とも勝ちました。実力で競うようにしてほしいという訴訟で、新興企業が軍に勝ったのです。この勝訴を分岐点として国防省との契約が一気に増え始めました。

カップはその空いた席に躊躇なく歩み入りました。メイブンは戦場の複数のセンサーと衛星データを統合して、干し草の山から針を見つけるように敵のターゲットを自動で認識するシステムです。映像と写真を機械が分析して、何が敵の車両で何が敵の兵力かを見分けます。人間が何日もかかることを機械は数秒で成し遂げます。グーグルの従業員たちが良心の問題で去った、まさにその仕事を、カップは道徳的義務と呼びました。

この分岐路で二つの企業がどのように分かれたのかを見ると、カップという人物がより鮮明になります。一方には殺傷技術に線を引いたシリコンバレーがあり、もう一方にはその線を越えることこそが責任だと信じるカップがいます。どちらが正しいのかはしばらく置いておくとしましょう。ただしカップがその選択で何を得たのかは、数字が語っています。

メイブン契約は爆発的に膨張しました。2024年5月にパランティアが国防省と結んだ「メイブン・スマート・システム」契約の規模は4億8,000万ドルでした。それから約1年後の2025年5月、国防省はこの契約を12億7,500万ドルに拡大しました。4億8,000万ドルから12億7,500万ドルへ。1年で約8億ドルがさらに上乗せされました。国防省が明かした理由は需要の増加でした。軍の利用者たちがこのソフトウェアをより多く使いたいと殺到しているということです。2025年4月には、NATO (北大西洋条約機構) がメイブン・スマート・システムを導入する契約に署名しました。既に35の軍事組織で2万人を超えるユーザーがメイブンを使用しています。

会社全体の数字も同じ曲線を描いています。2026年第1四半期、パランティアの売上は前年比85パーセント増の16億3,300万ドルを記録しました。米国政府部門の売上だけで6億8,700万ドルと、84パーセント増えています。会社は2026年通年の売上見通しを76億ドル前後に引き上げました。9・11直後にインキュテルから受けた200万ドルで始まった会社が、1四半期で16億ドルを稼ぐ会社になったのです。時価総額は2026年に入ってから2,700億ドルを超えました。

ハードウェアの速度戦も同じ流れの上にあります。米陸軍に導入された『タイタン (TITAN) 』トラックはパランティアのシステムを搭載した車両です。2025年3月の報道によれば、このトラックは設計から陸軍への納入まで90日で完了しました。軍事ハードウェアの歴史では稀な速度です。トラック内で兵士はドローンフィードとレーダーを手作業で逐一对照させません。システムが自ら標的を見つけ出し、追跡し、どの兵器で攻撃するかまで選んで提案します。人間の仕事は減り、機械の判断は増えました。

この変化の意味を誰よりも明確に示したのはカプ自身の言葉です。彼は戦争を防ぐ最良の方法は何かという問いにこう答えています。敵たちが朝目を覚ましてから夜眠りに落ちるまで、米国の圧倒的な軍力に怒りを感じ、骨の髄まで恐れるようにさせることだと。冷戦時代に核兵器が担っていた抑止の役割を、今ではAIが担うということです。敵が敢えて挑発する気を起こさせない力。それがカプが売る物の本質です。

その信念の根には一冊の本があります。2025年2月、カプは同僚ニコラス・ザンピスカと共に『技術共和国 (The Technological Republic) 』を刊行しました。その中で彼は政治学者サミュエル・ハンチントンの言葉を引き出しています。西洋文明が世界を支配するようになったのは思想や価値観、宗教が優れていたからではなく、組織された暴力 (organized violence) の適用において優れていたからだという言葉です。聞き心地の悪い文です。カプはその不快さを避けて正面から抱き抱えています。

彼の論理は一本の線でつながります。憲法が保障する言論の自由、能力主義、プライバシー保護といった西洋の権利は、無償で与えられたものではなく、力で守ってきたものだということです。中国とロシアとイランは自国民にこうした権利を与えていません。未来の世界秩序は、どの国が戦場にAIをより上手く実装するかで決まります。西側がこの競争で圧倒的優位を失えば、民主主義も法の支配も崩壊します。だからシリコンバレーは写真共有アプリや食事配達アルゴリズムのような浅薄な商売から脱して、国家防衛に奉仕する道徳的義務がある。

この信念が第1章で見た幼少期とどのようにつながるかを思い起こしてみると、一つの図が浮かび上がります。ファシズムが来たら自分が最初に壁に貼り付けられて銃殺されるだろうと言っていたユダヤ人であり混血の少年。その少年が抱いた恐怖は、自分のような異邦人を受け入れる社会の自由と法の支配を、圧倒的な軍力で守らなければならないという信念へと成長しました。彼が米軍について米国で最初に人種統合を実現した真の能力主義的機関だと賞賛を送ったのも、この文脈の中にあります。(この連結はカプ本人が一文で明示した陳述というより、彼の発言を一続きに見た解釈です。)

ここまで追ってくると、カプの物語は一編の英雄譚のように読まれる危険があります。孤独に育った哲学者が、自由世界を守る盾を作ったという話。しかし、その盾には別の側面があります。同じ技術が誰を向いているかによって、盾は網にもなるのです。

ガザがその別の側面を鮮烈に照らしています。2023年10月7日、ハマスの攻撃により1,200人のイスラエル人が命を落としました。その直後、カプはニューヨーク・タイムズの全面広告でパランティアはイスラエルを支持すると宣言しました。中立的な立場ではなく、陣営を明確にしたのです。彼はピーター・ティールと共にテルアビブで取締役会を開きイスラエル国防省と軍事契約を結びました。虐殺現場であるキファル・アザ・キブツを直接訪れたこともあります。パランティアのソフトウェアは行方不明の人質を特定・追跡するのに使用され、2024年4月にイランがミサイルとドローンを大規模に発射した際、イスラエルがこれを数分で撃墜するのにパランティアの技術が使われたと独立系アナリストたちは評価しています。

問題はその後です。戦場に投入されたAIが人命をどのように扱うかをめぐって、激しい倫理的論争が勃発しました。論争の中心に立ったのは『ラベンダー (Lavender) 』というイスラエルのAI標的指定システムでした。報道によれば、イスラエル兵は各標的を確認・決定するのにわずか20秒しか割き当てていません。1日に数十の標的が処理され、人間は機械が出した決定を承認する役に留まったということです。機械が名簿を作り、人間は承認ボタンを押します。18ヵ月を超えて続くガザの民間人大量殺害をめぐる論争が、このシステムに向けられた批判に集約されました。

カプは綱渡りをしました。パランティアがイスラエルとハマスの戦争に貢献しているという事実は誇りを持って明かしながら、自社製品がまさにそのラベンダーシステムであるかについては曖昧な態度を取りました。会社はその自社ソフトウェアがガザ爆撃に使用されたラベンダーやゴスペルといった標的指定システムとは無関係だと線引きしました。批判する側はこの否定を受け入れません。パランティアが標的リスト作成のためのデータ統合の中核的役割を果たすことで、自動化された殺害プロセスに直接的にも間接的にも結びついているということです。カプ自身は一つのインタビューでこのように認めたことがあります。われわれの製品は、時に、人を殺すのに使われるのだと。それでいながら彼は、技術むしろ民間人の被害を減らすことができると主張し、イスラエルの民間人対戦闘員の死傷者比率が人類史上かつてないほど優れていると弁護しました。同じ口から出た二つの文です。どちらが真実に近いかは、ガザの廃墟を誰の目で見えるかによって分かります。

盾が網に変わる場面は海外の戦場だけに限りません。米国内で、市民の日常の上で起こります。

2018年、ニューオーリンズであるプログラムが暴露されました。警察がパランティアのソフトウェアで市民のソーシャルメディアを分析し、犯罪歴を追跡し、ギャング団員との関係ネットワークを描きました。そのデータで、ある個人が暴力を行う可能性、あるいは暴力の被害者になる可能性をAIで予測しました。犯罪が起きる前に人間を目印をつけること、いわゆる『プリクライム (pre-crime) 』です。このプログラムはパランティアの顧問であり民主党の政治戦略家であるジェームス・カービルの指導の下、数年間にわたって秘密裡に運営されていました。ニューオーリンズの市民はもちろん、市庁舎の主要関係者さえその存在を知りませんでした。ロサンゼルス警察の『レーザー作戦 (Operation LASER) 』も似ていました。犯罪記録と社会的ネットワークデータを集めて常習犯にスコアをつけ、特定の個人を集中監視の対象にしました。

最も激しい論争を引き起こしたのは、米国移民税関執行局 (ICE) との契約です。パランティアはオバマ政権時代の2016年からICEにソフトウェアを供給してきました。この協力はトランプとバイデン政権を通じて続けました。2025年4月、ICEはパランティアに3,000万ドルを支払い、『移民オペレーティングシステム (ImmigrationOS) 』というシステムを構築させました。その年の9月には、約2,990万ドルの追加契約が加わり、2025年通年でICEとパランティアの契約規模は約2億8,700万ドルに達したと報じられています。パランティアはICEの最大の監視技術供給者となりました。

このシステムが何をするかは、画面上の一つの動作で要約されます。ICE職員が地図上に円や四角形を描くと、その中の標的人物たちがピンで浮かび上がります。そのピンはどこから来るのか。国税庁の税務データ、社会保障記録、パスポート、車のナンバープレート読み取り機、職場情報がリアルタイムで一つに溶け込みます。散らばった政府データが一つの画面に繰り合わされるその技術、すなわち戦場で敵を見つけ出していたまさにその技術が、今度は米国内に住む人間を見つけ出します。その結果は数万人を対象とした強制退去作戦へとつながりました。

批判は激しかったです。パランティア本社前に抗議活動家が集まり、カプと会社に向けて『テクノファシズム (technofascism) 』という言葉が飛んできました。罪のない貧困層と少数民族を狙った機械だということです。会社内でも亀裂が生じました。一部のエンジニアは、十分な監督なしに大規模監視を可能にするツールを作ることが危険な一線を越えるのではないかと声を上げました。従業員の圧力が数週間続いたため、カプは社内ビデオで直接答える必要がありました。

彼が出した答えは退却ではありませんでした。2026年2月、カプはあるテレビ番組でICEに反対して抗議活動する人々に向かってこう述べました。あなたたちこそ政府がパランティアをもっと使うよう抗

議すべきだと。彼の論理はこうです。同じソフトウェアが、国家が市民のプライバシーを違憲的に侵害することを防ぐのにも同様に使用できるということです。監視の道具がすなわち監視を防ぐ道具だという、逆転した主張です。幼少期から抗議現場で育った進歩主義者が、今は自分の会社前に集まった抗議者に向かってもっと多くの監視を求めよと言っているのです。

ICEとの協力を、カブは最後まで撤回しませんでした。トランプ第1期の厳格な家族分離政策に自社ソフトウェアが使用されたという非難と抗議が相次いだ時でさえ、同じでした。彼が示した理由は一貫していました。西洋のセキュリティと繁栄を守るためには厳密な国境管理が不可欠だということです。(この信念が契約維持の直接的かつ唯一の動機であったかどうかは、カブ本人の明示的な陳述で確認されていません。彼の公開發言から推論した解釈です。)

同じネットワークはヨーロッパにも広がりました。デンマークの国家警察はパランティアのシステムを導入し、イギリスの国民保健サービス(NHS)は7年間で3億3000万ポンドのデータ統合プラットフォーム契約を結びました。病院のデータをまとめて患者をより良くケアするという事業でしたが、アメリカの情報企業がイギリス国民の医療記録を扱うという点で強い反発を招きました。ドイツではヘッセン州を皮切りに、バイエルン、ノルトライン＝ヴェストファーレンなどでゴーサムに基づいた『ヘッセンデータ(Hessen Data)』システムが導入されました。犯罪者の車両、通話記録、接触者をボタン一つでつなぎ、関係網を描くツールでした。ところが、ドイツ連邦憲法裁判所がこのシステムにブレーキをかけました。明確な嫌疑のない無実の市民のデータまで無差別に照合することを許可したことが違憲だと考えたのです。裁判所は改正期限を与えて法律を改めるよう命じました。データを貫く技術の力が、つまりその技術がどこまで人を見つめることが許されるのかという憲法の問いに立ち戻った場面でした。

こうした全ての批判の前で、カーブが繰り返す異議が一つあります。パランティアのソフトウェアが世界で二番目とあれば申し訳ないほど厳格なプライバシー保護装置を内に備えているということです。彼は会社を初めて設立した時からデータの無差別的な収集を拒否したと力を込めて述べています。代わりに『述語ベースの検索(predicate-based search)』を導入したと言っています。簡単に言えば、誰かを見つめようとしたら、そうする法的根拠がまず存在しなければならないという意味です。漠然と全国民のデータをかき集める方式ではなく、決められた理由がある対象だけを選んで見るように設計されたということです。

その上にもう一つの装置があります。データに誰がいつアクセスしたかを、消すことのできない記録(immutable logs)で残す構造です。直列化と逆直列化、ブランチングのような技術用語が動員されていますが、核心は簡単です。誰がどの情報を見つめたのが永久に残り、後に漏れなく監査することができるということです。カーブはこの点を持ち出してパランティアが世界で最も悪用しにくい製品(the hardest product in the world to abuse)を作ったと自負しています。過去、アメリカのある民間機関がイスラム教徒のデータベースを作ってほしいと要求した時に毅然として拒否した件を、彼はその証拠として提示しています。

ここまでは彼の主張です。しかし、その主張が時間とともにどう揺らいだのかを、彼のハバーフォード同窓生であり伝記作家のマイケル・スタインバーガーが冷徹に指摘しています。スタインバーガーの伝記『シリコンバレーの哲学者(The Philosopher in the Valley)』が述べる核心はこうです。現実では、パランティアは自社ソフトウェアが誰にどのように使われるのかを直接に監督したり統制したりしました。

技術の隙間ではなく権限の構造に問題がありました。システム内で誰がデータにアクセスできるのか、その制限をどの程度厳格に守るのかを決める権限は、結局パランティアではなく顧客の手にありました。その顧客は政府であり、軍隊であり、捜査機関です。アクセス記録をいくら詳細に残したとしても、その記録を誰が見て誰に責任を問うかを決めるのもまた顧客です。道具を握る主体が人権を軽んじたり権威主義的に権力を振るう政府なら、そのすきのない記録は誰への約束にもなりません。濫用を防ぐロックの鍵を、作った人ではなく使う人が握っているわけです。

ここで、ある企業の別の選択が対比として浮かび上がります。AI企業Anthropicは、米国防総省が自社のチャットボットClaudeを市民監視や自律殺傷兵器に使うことを拒否し、明確なレッドラインを引きました。同じ時期、かつて自分をネオマルクス主義者にして進歩主義者と呼び、データ保護と人権を掲げていたカープは、Googleが良心を理由に去ったMavenの空白に躊躇なく入っていきました。一方は線を引き、一方は線を越えました。どちらが正しかったのかをこの本は断定しません。ただ、カープが初期に築いたその倫理的防波堤が、巨大な国家安保事業と天文学的利益の前でどこへ行ったのかは記録する価値があります。スタインバーガーの伝記が一方に傾いた美化された伝記だという批判を受けたという事実まで含めてです。カープを英雄として描いても、悪役としてのみ描いても、どちらも彼を見落とすことになります。

キーウのあの部屋に戻ってみます。ゼレンスキーの前に座ったカープは何を売っていたのでしょうか。自由世界を守る盾だったのでしょうか、それとも自社製品の力を証明する舞台だったのでしょうか。ウクライナの兵士を救った技術だったのでしょうか、ガザで20秒で人を名簿に乗せた技術と同じものだったのでしょうか。ICE職員が地図上に描いた円の中でピンで浮かび上がった人々は、カープが幼い時に恐れていたあのような迫害の対象とどの程度異なる処遇だったのでしょうか。

これらの問いは答えがきれいに落ちません。カープ自身がその答えを縫合することなく生きているからです。彼は圧倒的な武力のみが法治と自由を守ると信じながら、同時にその武力が誤って使われる危険を誰よりもよく知っている人です。自分の製品が人を殺すのに使われていることを認めながら、それがより多くの人を救うと主張しています。ファシズムが来れば最初に死ぬ人だと自分を定義しながら、ファシズムが握ったら誰よりも怖くなるツールを作りました。盾と網は同じ技術の二つの顔です。カープはそれを切り離すことができないということを知りながら、盾の方を選びました。その選択が正しかったのかは、この技術が次に誰に向くのかにかかっているでしょう。

弁護士、元国会議員、AI政策研究者

kimkj.com

第6章 テクノロジー共和国の宣言とシリコンバレー批判

谷間の異端児

2025年2月18日、書店の新刊コーナーに黒い表紙の本が並びました。タイトルは『テクノロジー共和国：ハードパワー、ソフトビリーフ、そして西洋の未来 (The Technological Republic: Hard Power, Soft Belief, and the Future of the West) 』でした。出版社はクラウン・カレンシー (Crown Currency) 、著者は二人でした。パランティアのCEOアレックス・カプと、同社の法律顧問兼企業業務責任者のニコラス・ザミスカ (Nicholas W. Zamiska) です。本は発刊と同時にニューヨークタイムズのベストセラー第1位に登りました。コードー行も書けない哲学博士が書いた、シリコンバレーへの宣戦布告だったのです。

この本が投げかけた最初の一文は迂回しませんでした。シリコンバレーは道を失った (Silicon Valley has lost its way) 。その一行を展開するのに本一冊がかかったのです。

カプがこのような本を出す人に見えたかといえば、そうではありませんでした。彼はインタビューで自分の会社の製品よりも政治と哲学をより長く語ることが多く、舞台の上で太極拳の動きを披露したり、髪の毛をボサボサにして現れたりして、人々を戸惑わせることがありました。そのような彼が机に向かい、ザミスカと一緒に一文一文を磨いて宣言文を書きました。会社の四半期実績ではなく、西方文明の運命をテーマにした本でした。表紙の重さがすなわち、彼が言いたいことの重さだったのです。

CEOが本を出すことは珍しくありません。通常は成功談です。いかに会社を大きくし、どのような教訓を得たか、読者に慰めと感動を与える話です。カプの本はそのジャンルを拒否しました。彼は自分の会社自慢をするために机に向かいませんでした。同業界への告発状を書くために向かったのです。自分が属するシリコンバレーに対して、お前たちは持っている才能を空しい場所に浪費していると正面から書きました。同じ地域の人々の名前を一人また一人と列挙しました。本を開く瞬間に敵が増えることを知りながらも、彼はペンを握ったのです。

カプの論理は歴史に端を発しています。彼はまず、人々が忘れていた事実を引き出します。今日のシリコンバレーは政府と軍隊の資金で始まったということです。1940年代から、連邦政府は大陸間ロケット、偵察衛星、そして後に人工知能の種となった研究に資金を提供しました。マウンテンビューに設立されたフェアチャイルド・カメラ・アンド・インストルメント (Fairchild Camera and Instrument) は、1950年代後半にCIAの偵察機器を製造しました。第二次世界大戦終了後、しばらくの間、アメリカ海軍の弾道ミサイルはすべてカリフォルニア州サンタクララ郡で生産されました。マンハッタン・プロジェクト、人を月へ送ったアポロ計画、インターネットの前身となったDARPA (国防高等研究計画局) のアルパネット。これらすべては、国家の目的とエンジニアの野心が一つ場で出会った結果でした。シリコンバレーのチップは最初からミサイルと一緒に成長しました。

ところが現在のシリコンバレーはこの家系図を恥ずかしく思っています。カプの診断は厳しいものです。今日のテクノロジー企業は、すべてを自分たちの手で成し遂げたという錯覚に陥り、国家安全保障との根を不快な過去として片付けてしまったということです。彼は問いかけます。この時代の優れた頭脳たちが何を作っているのかと。写真共有アプリ、食べ物配達アルゴリズム、果てはAIガールフレンド。彼はこれをアプリの暴政 (tyranny of the apps) と呼び、それに反逆するよう促します。iPhoneが本当に我々の文明の偉大な創造物であるのか。カプはこう言い返します。その物件が我々の生活を変えたことは確かだが、今や我々が何を達成できるかについての感覚そのものを閉じ込めているのだと。一世代

のエンジニアがロケットを打ち上げていた場所で、次の世代のエンジニアは人々がスクリーンをより長く見つめるようにすることに没頭していたのだということです。

ここで彼は名前を挙げます。漠然とした批判ではなく、実名です。スティーブ・ジョブズが成し遂げた革新は結局のところ、手首と懐に入る『自己の延長 (extensions of the self) 』に終わったと評しています。私的で個人的な革新に過ぎず、より大きな国家的企画への関心がなかったということです。マーク・ザッカーバーグは、何ら大きな世界観も政治的企画も持たず、何かを作る行為そのものに没頭するエンジニア世代を代表していると見ています。Googleの昔のモットー「邪悪になるな」 (Don't be evil) についてはより鋭いです。その否定形の文の背後には、薄く偽装された虚無主義 (thinly veiled nihilism) が潜んでいるということです。何をするかではなく、何をしないかという誓いの中に、彼は空っぽの場所を見えています。

そして2018年の一場面を引き出します。その年、Google本社では数千人の従業員が社内請願書に署名しました。国防総省の人工知能目標識別事業『プロジェクト・メイヴン (Project Maven) 』に同社が参加することに反対する内容でした。我々が作った技術が人を狙うために使われてはならないというのが彼らの論理でした。Google経営陣は従業員の圧力に押されて、契約更新を放棄しました。道徳的純潔さを守った決定として拍手も受けました。カプから見れば、それは空っぽの椅子でした。そしてその空っぽの椅子に座ったのがまさにパランティアでした。Googleが引いた場所で、パランティアは戦場のアメリカ軍兵士のために、致命的な人工知能を喜んで作る側を選びました。同じ技術の前で、ある企業は手を引き、別の企業は手を差し出しました。カプはこの対比を恥じませんでした。むしろ誇りに思っていました。

タイトルに含まれる二つの単語を解きほぐすと、カプの考えが一目瞭然です。ハードパワー (hard power) は軍隊と武器、実際に人を動かし脅かす力です。ソフトビリーフ (soft belief) は、ある社会が自分自身について抱く信念、何のために存在するのかについての信念です。カプの主張は、二つが別々に動いてはならないということです。強い軍事力だけあって、それを使う信念がなければ無力であり、高潔な信念だけあって、それを守る力がなければ空虚だということです。彼から見れば、西方は信念を失い、シリコンバレーは力を見当違いのところに使っていました。二つの流れを再びつなぐことが、彼が言うテクノロジー共和国の再建です。

ここまでが本の半分です。残りの半分はより重いのです。

カプは時代が変わったと宣言します。冷戦を支えていた『原子力抑止の時代 (atomic age of deterrence) 』は終わり、人工知能に基づく新たな抑止の時代がやってきたということです。彼は政治学者サミュエル・ハンティントン (Samuel Huntington) の一文を何度も引用しています。西方文明が興隆したのは、思想や価値、宗教がより優れていたからではなく、組織された暴力を適用する優越性 (superiority in applying organized violence) のおかげだったという言葉です。耳にするのが不快な文です。カプはまさにその不快さが、我々が目を背けてきた真実だと言います。この世紀の本当のハードパワーはソフトウェアの上に作られざるを得ず、アメリカと西方が戦場でAI兵器システムの圧倒的優位を握らなければ、その優位は中国とロシアとイランが手にするということです。

だから彼は言い切ります。本当の質問はAI兵器が作られるかどうかではなく、誰がどのような目的のためにそれを作るのかということです。道徳的純潔さを守ると言いながら西方が躊躇している間に、敵対国は演劇のような議論もなく前に進んでいると彼は警告します。彼から見れば、アメリカ憲法は神が与えた権利を約束しています。言論の自由、銃を持つ権利、プライバシーの保護。権威主義国家は自国

民にそのようなものを認めません。では、その権利を守る力はどこから来るのか。カプの答えは冷たいものです。道徳的訴えや雄弁 (soft power) ではなく、その訴えを裏付ける実際の力から来るのだということです。

このような論理がどこから来たのかを問うなら、彼の学生時代にさかのぼる必要があります。カプはドイツのフランクフルト、ゲーテ大学で社会理論の博士号を取得しました。ユルゲン・ハーバーマス (Jürgen Habermas) の影響下で勉強し、論文はカロラ・ブレーデ (Karola Brede) の指導を受けました。ハーバーマスは、理性的な対話と議論を通じて社会はより良い場所に向かうと考えた人です。人々が自由に言葉を交わせば、最終的には、より正しい結論に達するという信念です。ところが『テクノロジー共和国』のカプは、その信念の限界を指摘します。敵が議論に応じないとき、対話は何ができるのかということです。理性的な対話を学んだ学者が、対話を通じない相手の前では力が必要だと結論づけます。彼が生涯恐れてきたのはファシズムであり、ファシズムは議論によって説得されないということを、彼はドイツの歴史から学びました。教養高い社会がどのようにして野蛮へと崩れ落ちたのかを、その国の言語で読んだ人です。

技術エリートが国家防衛に献身すべき理由を、彼は負債の言語で説明しています。企業とエンジニアが真空の中で金持ちになったわけではないということです。彼らの成功を可能にした自由民主主義の国家に対して、彼らは深い『道徳的負債 (moral debt) 』を負っています。カプの比喻は明快です。米海兵隊員がより良いライフルをくれと言え、我々は当然それを作ってやるべきだと。ソフトウェアも同じだと。そしてシリコンバレーに向けて彼は一行で矢を放ちます。無料メールだけでは足りない (Free email is not enough) 。無料検索と無料メールを世の中に放ち出したことで、国家に負った負債をすべて返したと思うなということです。

ここで本は論争的領域へより深く入っていきます。カプは国防の負担を少数の軍人のみに押し付ける社会を批判しています。彼は普遍的な国家奉仕 (national service) について真摯に論じるよう提案しています。戦争のリスクと費用をすべてが分かち合うときにのみ、次の戦争について慎重に決定するようになるということです。戦地に赴く人が他の子どもたちばかりの場合、社会は戦争を軽視するという論理です。彼はそこで止まりません。戦後のドイツと日本の非武装化 (neutering) は逆転させるべきだと主張しています。ドイツの非武装は、現在ヨーロッパが高い代償を払う過度な矯正だったこと、日本の平和主義はアジアの力の均衡を揺るがす可能性があることが彼の主張です。両国は再び強いハードパワーで武装し、技術中心の西方同盟の軸となるべきだということです。平和主義を美德として学んだ世代には耳障りな言葉です。カプはその不快さを引き受けています。

彼は西側内部の文化的相対主義と政治的正しさに正面から対峙しています。ある文化は驚くべき発展を遂げ、ある文化は後退的で有害だという価値判断さえもタブーになった時代を、彼は拒否しています。すべての文化が平等だから批判も評価もするなという新しいドグマを彼は受け入れません。一体何への包含なのか (inclusion into what?) と彼は問い直しています。定義すべき国家文化そのものを拒否しながら包含を叫ぶことは、ただの空洞な多元主義 (hollow pluralism) に過ぎないというのが彼の見方です。

ここで簡単な分類が思い浮かびます。この人は右派だ。しかしその分類は本を最後まで読む前の既決の結論です。

同じ本でカプは重大犯罪を放置した政治家を非難しています。彼らが有権者と寄付者を気遣うあまり、人命を救う切迫した試みを放棄したと述べています。アメリカ中の政治家が重大犯罪の前で肩をすくめ、諦めているということです。彼は公務員の給与が低劣なため、優秀な人材が公職を去ると主張し、公共部

門の報酬体系を改める必要があると論じています。民間企業が連邦政府が公務員に支払う水準で従業員に給与を支払うなら、その企業は生き残れないだろうと指摘しています。公人の私生活を無情に暴露し、金儲け以外の何かをしようとする人を貶める世論が、結局は善良な人々を公職から追い出していると嘆いています。これは右派の言語だけではありません。労働者の生活、公共の責務、弱者の安全を心配する声が同じ口から出ています。カプを一言で決めつけようとする試みは、本の次のページで何度も砕け散ります。

公職社会を批判する彼の方法にも、彼の出自が滲み出ています。彼は公務員が我々の聖職者である必要はないと述べています。道徳的に完璧な人間のみが公職に就くべきという要求が、実は仕事ができる普通の人を公職から追い出すということです。潔癖さが無能を招くという診断です。彼は能力で人を選び、能力で評価する組織を信頼しています。第1章で彼がアメリカ軍について、アメリカ社会で人種統合を初めて成し遂げた本当の実力主義機関だと賞賛していたことと同じ筋です。出身と背景を問わず、成果で序列を決める場所で、どこにも完全には属することのなかった彼は、ようやく公正さを見たのです。

イーロン・マスクを称賛する箇所でも本の質感が再び表れます。市場が停滞している場所で何かを築こうとする人としてマスクを挙げながら、億万長者は金を稼ぐだけでいいかのように彼の巨大な好奇心を嘲笑する文化を批判しています。起業家の野心が国家的企画と出会うことを奨励すべきだということです。そしてこのすべての診断の解決策として、カプが示すのはイデオロギーではなく方法論です。政府がシリコンバレーの「エンジニアリング・マインドセット (engineering mindset)」を受け入れるべきだということです。机上の議論と非効率な官僚主義の代わりに、結果を見て直接問題に当たり、失敗を繰り返しながら道を見つけ出す方式です。彼は本当の根本原因が出るまで問い続ける「5つのなぜ (five whys)」、中央の指示なしに集団が自ら最適解を見つけ出すミツバチの動き、カール・ポッパー (Karl Popper) が述べた時計と雲の比喩を引き出しています。硬直した時計ではなく柔軟な雲のように動けということです。彼が力を入れて述べたのは最後です。真の革新は順応からではなく反抗から生まれ、権威に異議を唱える「建設的不服従 (constructive disobedience)」を奨励する文化を築く必要があるということです。この方法論は本の中の物語に留まらず、パランティアを運営する実際のルールでした。顧客企業が何か問題を訴えると、パランティアの従業員たちはその症状の原因を問い、その原因の原因をさらに問います。表面の不便さではなく根に触れるまで掘り下げなのです。会社内には上から下へ厳密に整った命令系統の組織ではなく、問題を最もよく知る人がその時点での決定権を握る緩い構造がありました。ミツバチが統領の指示なしにも蜜のある場所を見つけ出すように、会社がそう動くことを彼は望んでいました。失読症に苦しんでいた子どもが、模範解答の道が塞がれて自分自身の道を切り開かねばならなかった少年が、今その不服従を経営哲学として決めました。

ところがこの本で矢を最も多く受けたのは右派ではありませんでした。カプ自身が生涯投票してきた人たち、民主党でした。

この批判の重さを理解するには、彼がどこから出発したのかを見る必要があります。カプはかつて自分をマルクス主義者、新社会主義者と称していました。スタンフォード・ロースクール時代は、自由意志主義者のピーター・ティールと野生動物のように激しく政治イデオロギーについて衝突した左派青年でした。彼は長く民主党を支持し、2016年の大統領選挙ではヒラリー・クリントンに投票し、2020年から2024年の間はジョー・バイデンとカマラ・ハリスのキャンプの主要な寄付者でした。2017年頃までは、彼はトランプについて、その人の何の点も尊敬していないと述べていました。最近まで、彼は自分を「党員証を持つ進歩主義者 (card-carrying progressive)」と称していました。貧困者すべての生

活がよくなることを望むと繰り返し述べていました。

そのような人が今、自分の陣営に向かって鋭い言葉を放ちます。彼の弁明は一文に圧縮されます。彼が左派を離れたのではなく、左派が彼を離れたということです。2025年に彼の伝記を出版したマイケル・スタインバーガー (Michael Steinberger) に、カプは同様の趣旨で語りました。私は自分の政治を変えなかった (I didn't shift my politics) 。進歩が進歩の意味を失ったというのが彼の診断です。本当の進歩とは労働者が今日より明日より良い生活を送るようにすることなのに、今の進歩派は統制のない「開かれた国境 (open borders) 」を黙認しながら労働の価値を低下させているということです。国境を開いて統制を失えば賃金が崩壊し、その怒りに極右が育ち、一度極右が入ってくれば二度と追い出せないと彼は警告しています。だから彼にとって厳格な国境統制は保守の政策ではなく労働者を守る進歩の政策です。

この信念は言葉に留まらず、会社の契約へと発展しました。パランティアがアメリカ移民税関執行局 (ICE) にソフトウェアを提供すると、違法移民と重大犯罪者の追放に技術を使うとして激しい反対デモが起きました。会社の前に人々が集まり、従業員さえ不快感を示しました。カプは後退しませんでした。厳格な国境政策は国家安全保障に不可欠だと述べて、契約を最後まで擁護しました。かつてデモ現場で両親の手を握って育った子どもが、今や自分の会社の前で繰り広げられるデモに直面しても立場を変えませんでした。

彼は「目覚めている (woke) 」という思考方式を、会社とアメリカ全体を脅かす核心的な危険として挙げました。パランティアの技術を「反ウォーク (反) 」と呼んだこともあります。一つの会社のCEOが自社製品を政治的陣営の言語で規定することは通常のことではありません。通常、企業は政治を避けます。両側の顧客を失わないための打算です。カプはその打算を拒否しました。会社の色合いを明確に表すことこそが会社のアイデンティティだと信じていました。その選択が一部の才能を去らせ、一部のデモを招いたとしても、彼はその代償を払う覚悟ができていました。

彼は民主党内の知識人階層と名門大学機関が西洋の知的伝統を自己嫌悪と嘲笑の対象にしたと批判しています。アイデンティティ政治と果てしない被害者意識の論争に陥りながら、実際には貧困層、少数派、黒人労働者が被る犯罪被害と経済的衰退を支援できていないということです。彼がよく引き合いに出す事例はドイツです。彼は成人人生の半分以上をドイツで過ごし、フランクフルトのゲーテ大学で博士号を取得しました。ドイツの緑の党が15~20パーセントの得票率の少数政党でありながら、道徳的優越性を武器に移民論議そのものを極右の犯罪として烙印を押し、結局移民政策全体を支配していると彼は指摘しています。その結果、怒った普通の市民が極右政党「ドイツのための選択肢 (AfD) 」へ向かう破局が生じたということです。彼はこれを誰かの盲目的なイデオロギーが生み出した「産物 (product) 」と呼んでいます。そしてアメリカ民主党もこの道を行けば、自分たちの首を絞める「自殺の踊り (suicide dance) 」を完成させることになるだろうと確信しています。

すべての怒りが一点に収束した日があります。2023年10月7日です。ハマスがイスラエルを攻撃したその日、スタインバーガーの伝記によれば、カプは移民問題が民主党にとって選挙上不利な争点を超えて、ユダヤ系米国人の物理的生存と直結した脅威となりうると判断するようになります。この事件は、彼が民主党と決定的に袂を分かť分岐点となりました。事件直後、彼はピーター・ティールとともにテルアビブでパランティアの取締役会を開き、イスラエル国防省と軍事技術契約を結び、ニューヨーク・タイムズの全面広告によってパランティアがイスラエルを支持するという立場を表明しました。第1章で少年時代のカプが語った言葉を思い出します。ファシズムが襲来したなら、最初に壁に張り付けられて銃殺されるのは自分だろうという、その言葉を。10月7日は、その古い恐怖を抽象から現実へと引

き出したのです。

今や彼は自分を、どの政党にも無条件には拘束されない「独立した有権者(independent)」と規定しています。国境を強く統制し、米国の抑止力を完全に維持すると約束する候補者ならば誰でも支持する準備ができていると言っています。かつてトランプの人間の側面をだれよりも嫌悪していた彼が、今ではトランプが移民統制と強い抑止力の再構築という二つの点に限ってなら成果を上げたと公開的に称賛します。それでもなお、彼はトランプへの無条件の支持者ではありません。彼は自分が進歩を捨てたことではないと今なお言っています。2024年の選挙期には民主党の方向性にまったく満足していないと公開的に述べながらも、一方ではトランプに反対して投票するとも言っています。どちらの陣営も彼を完全に自分のものにすることはできませんでした。

彼の変化を一語で括りたい人たちは、彼を「テクノ・ナショナリスト(techno-nationalist)」と呼びます。象牙の塔でマルクスの疎外された労働について論じていた進歩的な哲学者が、より冷酷で残忍な地政学的競争の現実と向き合いながら、人工知能時代の米国の優位性を信仰のように信じる人へと変わったということです。しかし、その言葉さえも彼をすべては包含できません。彼は米国の優位性を掲げながらも、その優位性は異邦人を受け入れることができる社会を守るためのものだと言います。強力な軍隊を擁護しながらも、その軍隊が人種統合を最初に成し遂げた場所だと称賛しています。彼の民族主義は純血主義ではなく、自分のような混血児と少数民族が生き残ることができる秩序を守ろうとするところから生まれています。

迫害の一番目の対象が自分だと信じてきた黒人ユダヤ系混血の読字障害を持つ異端児が、今や致命的な人工知能兵器で西方の優位性を守ることだけが、逆説的に自由と多元主義を守る道だと確信しています。迫害を恐れていた人が、監視と標的化の技術を売る立場に立ちました。進歩を標榜する人が、進歩派陣営に向かって大声で叱責しています。

本の運命は二つに分かれました。読者たちは熱狂しました。出版と同時にニューヨーク・タイムズのベストセラー第1位に登り詰め、米国公共ラジオ(NPR)はその年の本として選びました。シリコンバレーとワシントン両方で、人々がこの本を話題に挙げました。一方、一部の批評家たちは冷淡でした。英国の新聞インディペンデント(The Independent)を始めとした書評は、この本に明確なテーマがなく散漫だと厳しく評価しました。ある書評は、その年に読んだ本の中で最も失望させられたものだと言いました。同じ本について、一方は時代の宣言文だと呼び、別の一方は中身のない雑文だと呼びました。その分裂自体が、カープという人物を巡る評価の縮図でした。

本は明らかに矛盾に満ちています。しかし、その矛盾は欠陥というより、カープという人物自体の形態かもしれません。彼は右派の言葉で軍隊を擁護しながら、左派の言葉で労働者を案じています。アイデンティティ政治を軽蔑しながら、自分をユダヤ人であり混血児だと規定しています。道徳的訴えかけの無力さを嘲笑いながら、本全体が一つの巨大な道徳的訴えかけです。彼を保守派に括ろうとすれば進歩的な文章が飛び出し、進歩派に括ろうとすれば軍国主義が邪魔をしています。

この矛盾を誰よりも間近で見た人は、彼を30年以上にわたって知り続けていた同級生でした。マイケル・スタインバーガーは同じ年の11月、カープの初の伝記を出版しました。数十時間に及ぶカープ本人とバランティアの従業員たちとの対話に基づいて書かれた本です。経営学も計算機科学も学んだことのない一人の哲学者が、いかにして巨大なテクノロジー企業を築いたのか、彼がその企業がしている仕事の倫理的重みとどのように格闘してきたのかを追跡した記録です。英国の日刊紙の一つは、この企業について「あなたのすべてのデータは私たちのもの」というタイトルで書評を掲載しました。伝記作家が

友人だったという事実は、この本に両刃の剣となりました。親しいからこそ深く見つめましたが、親しいからこそ美化の嫌疑も付きまといました。

彼は同じ年に出版された自分の伝記の表題そのままに、シリコンバレーの哲学者でした。マイケル・スタインバーガーが付けた本の表題は『谷の哲学者：アレックス・カープ、パランティア、そして監視国家の台頭(The Philosopher in the Valley: Alex Karp, Palantir, and the Rise of the Surveillance State)』でした。著者はカープのハバーフォード大学の同級生です。哲学を学んだ人が兵器を売り、迫害を恐れていた人が監視道具を作り、進歩を標榜する人が進歩を叱責します。カープが投げかけた質問は、本の最後の章を閉じてでも閉じられません。誰が何の目的でそれを作るのか。その質問を投じた人が、まさにそれを作る人だという事実の前で、読者は容易にどちらの側に立つべきかを決定することができません。

弁護士、元国会議員、AI政策研究者

kimkj.com

第7章 奇人の日常

谷間の異端児

ニューハンプシャー州ライマンの森の中、膝まで雪が積もった狭い道の上を一人の男がすべるように走っています。細いクロスカントリースキーの二足に身を乗せ、ポールを交互に突きながら前へ進みます。吐く息が白く立ちこめます。彼はノルウェースキー国家代表チームの訓練服を着ています。ノルウェーとの血縁も、国籍のいかなる関係もない人物なのに。その日、彼が走った距離は19キロメートル前後でした。翌日も、その次の日も同様でした。彼にとってこれは運動ではなく、一日を開く儀式に等しいものです。

この男がアレックス・カップです。2024年一年だけで68億ドルの報酬を受けたパランティア(Palantir)の共同創業者兼最高経営責任者です。日本円にして9兆円を超える金額です。世界中の軍隊と警察と情報機関が彼の会社で作ったソフトウェアを使っています。そうした人物が、誰もいない森で一人スキーをしています。シリコンバレーの他の億万長者たちが、巨大なヨットと美術品と華やかなパーティーで富を誇示するとき、カップは正反対の方向へ歩みます。彼の富は、自動車でも、邸宅でも、奢侈品でもないところに積み上げられています。

まず家の話からしなければなりません。カップは世界中に家を持っています。資料によれば、11軒とも20軒ともいわれています。不動産投資とするには奇妙な点があります。その家々の大部分が、人が住むのに適した場所ではなく、クロスカントリースキー・トレイルに近いという一つの理由だけで選ばれた、空いた小屋だからです。誰かは海辺の別荘を買い、誰かは都心のペントハウスを買います。カップは雪道近くの空いた小屋を買います。家の価値を測る彼の物差しは、他の人々と単位が異なります。

彼の主な住まいはライマンの森の中にあるオーストリア様式の住宅です。玄関ドアにはメズザ(mezuza)が付いています。ユダヤ教の家庭が門柱に付ける小さな筒です。中に入ると、家具がほとんどありません。空いているとも言えるほど簡素です。理由を尋ねると、彼はこう答えました。周囲に物が多すぎると、制約を受けて、少し閉じ込められているような感覚を覚えるのだそうです。億万長者が物に閉じ込められる感覚を避けるために、わざわざ空いた家に住んでいます。彼はこのニューハンプシャー州の家を、内向的な人々の天国と呼びました。人々を丁寧に招待することはできるが、誰も来ないから。冗談のように聞こえますが、その中に本心が込められています。彼は一人でいる時間を楽しみます。

家では、彼は携帯電話をファラデー・ケージ(Faraday cage)に入れておきます。金属メッシュで電波を遮る箱です。信号は入りもしなければ、出もしません。国家安全保障とスパイ活動を扱う会社を率いる人物の職業病といえば職業病です。彼はこう言いました。中国が私の電話を盗聴しようとしなければ、それはむしろ狂ったことだろうと。盗聴を当たり前の前提として暮らしている人物の日常です。空の家、空の壁、そして電波が遮られた電話。彼が作る製品は、世界のすべてのデータを一つの画面に貫き通して見せる監視ソフトウェアです。実のところ、自分自身の信号は金属製の箱に閉じ込めています。

彼を間近に支える人々の面々もまた、彼の世界を映し出しています。彼の側には、一人ではなく、複数の国から来た専門家たちがいます。ノルウェー人のスキーインストラクターが彼のスキーを見守り、スイス・ポルトガル系のシェフが食事を用意し、オーストリア人の秘書が日程を立て、アメリカ人の射撃インストラクターが銃を教えています。彼が自分を極端な内向型人間(extreme introvert)と呼んでいるにもかかわらず、そうなのです。一人でいたい人の周囲にこれほどの人々が囲んでいるという事実その

ものが、彼の矛盾をそのまま示しています。彼は世界と距離を置こうとしながら、その距離を保つために世界から人々を引き寄せています。

隠遁がどこまで行き着くことができるかを示す逸話が一つあります。ニューハンプシャーの森にリバー・デイブ(River Dave)と呼ばれる隠者が住んでいました。彼は川沿いの森の中で一人、長年を過ごしていたのですが、ある日その土地から追い出され、小屋さえも火に焼かれてしまいました。カップはこの見知らぬ隠者に、自分の金18万ドルを渡しました。伝記作家マイケル・スタインバーガー(Michael Steinberger)は、この寄付を慈善ではなく、一人の隠者が別の隠者に向けて送る深い連帯の表れとして読み取りました。森から追い出された者に、森を愛する者が手を差し伸べたのです。そこに自分の姿を見たのかもしれませんが。

私生活も普通の枠組みから大きく外れています。カップは58歳になっても一度も結婚したことがありません。子どもを持つという考えだけで蕁麻疹が出ると表現しています。代わりに、彼は世界の異なる地域に住む二人の女性と同時に、長い愛人関係を継続しています。パランティアの同僚の一人が、この独特なやり方に名前を付けました。地理的に一夫一妻(geographically monogamous)だと。一つの地域では一人の人だけに会うので、その地域では一夫一妻で、地域を移動すれば相手も変わります。彼は年に250日から300日近く、旅の途中で過ごしています。その放浪の人生の構造が、彼の恋愛方式までも形作ってしまったわけです。

この孤独を楽しむという人が、実のところ一人ではほとんど何もしません。ここに彼のもう一つの矛盾が挟まります。彼の側には、常にノルウェー人警備員チームが陣取っています。そこにノルウェー人のスキーインストラクター、スイス・ポルトガル系のシェフ、オーストリア人の秘書、アメリカ人の射撃インストラクターが彼の一日を支えています。かつて、彼は大きな警備員たちが常に側にいるため、誰かに色目を使う機会さえ奪われると不平を言ったこともあります。完全な孤立を望みながら、その孤立を守るために一団の人々を従えています。空いた家に住んでも、手ぶらでは暮らしていません。

最も奇妙な事実とは別のところにあります。この巨大なグローバル企業のトップは、生涯自動車の運転を学んだことがありません。理由を尋ねると、彼は特有のユーモアで応じました。最初は貧困すぎて学べず、次には大金持ちになってしまったからだ。1万2千ドルで始めた人が、68億ドルを受け取るCEOになるまで、一度もハンドルを握りませんでした。貧困と富の両端を経験する間に、運転だけは最後まで学びませんでした。

冗談の背後には、冷徹な自己認識が潜んでいます。彼は注意欠陥多動性障害(ADHD)を患っており、抑制できない妄想癖を持っています。だから運転ができません。自転車も乗りません。下り坂を高速で駆け下りるアルペンスキーも絶対に乗りません。彼は自分を空想家(dreamer)と呼び、理由を述べています。想像にふけると、すぐに転んでしまうと言うのです。彼の言葉はこうです。私は夢を見始め、そして転んでしまう。15年前に彼に会っていたら、会話の3分の2は、5年前に行った散歩や大学院時代のある会話、ある同僚が投げかけた言葉の隠された意味を延々と虚空に向かって反芻する想像で満たされていたはず。頭が止まらない人です。だから速い下り坂は彼にとって危険です。体は道の上にあるのに、心は5年前の散歩道を歩いているからです。

話し方にも同じパターンがあります。彼は吐き出すように爆発的に話します。しばらくそうやって話した後、エネルギーは急速に放電します。そうすると、室内用の固定式自転車に乗ってペダルを踏むか、本を開いてエネルギーを再充電しなければなりません。言葉が運動で、運動が充電です。普通の人の一日が仕事と休息に分かれるなら、カップの一日は爆発と回復に分かれます。その間を埋めるのはスキー

であり、瞑想であり、気功です。止まらない心を抱えて行き来する人が見つけ出したバランスの方法です。

平地をゆっくり走るクロスカントリースキーだけに乗る理由がここにあります。それは転ぶ危険が少ないのです。そしてそれは、彼が心を制御する方法でもあります。カップにとってクロスカントリースキーは趣味ではありません。ほぼ宗教的な修行に近いものです。彼は毎日12から15マイル、19から24キロメートルをスキーで走ります。ノルウェー国家代表の訓練服を日常着のように着て出勤します。コロラド州デンバーにあるパランティアの本社を、彼はイディッシュ語で「安物の衣料品工場」という意味のシュマッテス・ファクトリー(schmattes factory)と呼びます。自分の会社を衣料品工場と呼び、ノルウェースキー衣を着て現れるCEOです。

彼の運動哲学は数字でいっぱいです。彼は有酸素運動能力を示すVO2 max の数値が90を超える人の98パーセントはノルウェー人であろうという理論を信じています。心拍数をゾーン1とゾーン4だけで厳密に行き来し、その中間のゾーン2は徹底的に排除するノルウェー式トレーニング法に従っています。懸垂バー(dead hang)を4分36秒間保つことができ、最近5分5秒まで延ばしました。彼は懸垂バー(dead hang)とファーマーズ・ウォーク、体重に対する筋力、そしてVO2 maxを、人間の本当の健康を測る唯一の指標だと固く信じています。かつて彼を取材したスタインバーガーは、昼間でもローラースキートレーニングをやめないカップにインタビューするために、直接自転車に乗ってカップと並んで走りながらレコーダーを突き出さなければならませんでした。インタビューをするには従って走らなければならない取材対象者です。

この数字への執着には理由があります。彼は懸垂バー(dead hang)とファーマーズ・ウォーク、体重に対する筋力、VO2 maxだけが人間の本当の健康を測ると信じています。お金でも、役職でも、株価でもありません。自分の体だけが管理できるものだいうように、彼はそれらの数字だけを延々と引き上げています。会社の時価総額は市場が決め、政治の行方は有権者が決め、ファシズムが来るかどうかは歴史が決めます。彼が一人で決められるのは、懸垂バーに何秒より長く掛かるかだけです。だから彼はそこに掛かっています。文字通り掛かっています。

有酸素運動だけではありません。彼は毎日、瞑想と気功(Qigong)、太極拳(Tai Chi)を修練します。CEOとして受ける極度のストレスとコルチゾールを制し、柔らかいエネルギーと強いエネルギーのバランスを取るために、太極拳が絶対的だと信じています。オフィスあちこちには太極拳修練用の真剣が置いてあります。業務中に、面接さえしていても不意に立ち上がって太極拳の動作を実演します。従業員向けの太極拳クラスを自ら率いることもあります。データ分析企業のオフィスに真剣が置いてあり、面接の途中でCEOが剣を振るのです。それが彼が止まらない精神を抑え込む方式です。

食えることさえそうです。カップケーキを食べるときには、彼はパン部分を無慈悲に切り落とします。そしてその上に乗せられた砂糖のフロスティング、アイシング(icing)だけをしゃべります。人々がいつたいなぜカップケーキのパン部分を食べるのか、まったく理解できないと彼は断言します。一日の半分以上をドイツ語で会話します。アメリカ企業のCEOが、ドイツ哲学で博士号を取った痕跡を日常の言葉に引きずっているのです。シュタインバーガーが彼の伝記につけたタイトルが「シリコンバレーの哲学者」(The Philosopher in the Valley)であるのには理由があります。カーブはコーディングができません。彼が創設した会社の製品が何で動いているかを、彼は直接書くことができません。そのような人が、世界で最も精妙なデータ企業の頂点に立っているのです。彼の武器はコードではなく、頭の中の哲学です。ハーバースを読んでいたフランクフルトの大学院生が、コロラドの衣料品工場にノルウェーのスキー服を着て真剣を振るCEOになったのです。この二つの姿の間の距離が、彼を説明する距離です。

彼自身も自分が普通と異なることを知っています。彼は大勢の前でもっと平凡に見えるようにしてくれるコーチを雇いましたが、まったく効果がなかったと冗談を言います。平凡になる方法を学ぼうとして失敗した億万長者です。彼は自分をアメリカのコメディアン、ラリー・デイビッド (Larry David) になぞらえ、自分のリーダーシップを描いたシットコムが出るなら、タイトルは「カープの情熱」 (Karp Your Enthusiasm) になるだろうと言っています。彼は自分を「クレイジー」 (batshit crazy) と呼びます。それも恥ずかしがりながらではなく、快活に、ほぼ誇り高くそう言います。会社を冗談で経営し、面接で剣を振るい、カップケーキのパンを切り落とします。ここまでを見ると、彼は限りなく軽い人に見えます。

その軽さの下に、重い告白が一つあります。2013年のフォーブス・インタビューで、カープはこう述べていました。自分がパランティアのことを考えない唯一の時間は、水泳をしているとき、気功を修練しているとき、そして性行為中だけだと。目覚めているほぼすべての瞬間を会社が占めているという意味です。水の中で、気功の動作の中で、そして人の懷の中で。彼が会社を忘れる三つの場所は、偶然にもすべて身体を深く使う場所です。頭が止まらない人は、身体で頭を引っ張る方法を身につけたのです。

しかし、そうではないのです。

これらすべての奇行の底には、一つの感情が流れています。恐怖です。シュタインバーガーは、カープを真に動かしている原動力が何でもない恐怖だと断定しました。快活さは表面で、その下は暗いのです。毎日19キロメートルを走るスキーも、5分耐える死に体運動も、空の家とファラデー・ケージも、ノルウェーの護衛部隊も、突き詰めればすべて同じ根から生えたものです。何らかから自分を守ろうとする身振りです。その何かの名前を、カープは明確に言及しています。

彼は2023年のあるインタビューで、こう告白しました。もしこの世界にファシズムが訪れるなら、最初にあるいは二番目に銃殺され壁に吊られる人は、まさに自分だろうといつも考えていたと。彼の英語原文はさらに短く、重いです。「私の最大の恐怖はファシズムだ」 (my biggest fear is fascism) 。この文は、本書の第一章でもうすでに一度響いたことがあります。少年時代のカープが述べた言葉です。ファシズムが来れば、最初に銃殺され壁に吊られる人は自分だというその言葉です。フィラデルフィアの抗議現場と安息日の食卓で育った混血の少年の恐怖が、58歳の億万長者の口から、ほぼ一言一句同じ文として再び出てくるのです。30年経つのに、その恐怖は一文字も摩耗していません。

その恐怖がどこから来たかは、すでに見てきました。ユダヤ人の小児科医である父親とアフリカ系アメリカ人の芸術家である母親の間に生まれた混血、急進的な進歩主義の家庭の息子、激しい読字困難症とADHDを持つアウトサイダー。ファシズム的暴力が人種と思想と神経多様性を物差しにして誰かを標的にするなら、カープはその条件に一つも欠けることなく当てはまります。彼はこの事実を幼少期から骨の髄で知っていました。リストを作ってみろ、誰が最初に首を絞められるのか。それは自分だろう。これが彼の自己認識でした。

シュタインバーガーの分析はここからさらに一歩進みます。カープがパランティアを創立し、そこに執拗に献身する理由が、本質的にあまりにも個人的なものだという診断です。パランティアはカープ自身、そして彼と同じく疎外された異邦人たちのために、世界をより安全にしようと積み上げた巨大な砦だということです。会社を運営しながら下す多くの決定が、彼を圧迫する不安とファシズムに対する不吉な予感から生じるものだというのです。恐怖が動力です。怖くて止まる人もいれば、怖くて砦を築く人もいます。カープは後者です。

この恐怖は彼の頭の中で学問にもなりました。スタンフォード・ロースクール時代、彼は極端な自由意志主義者ピーター・ティール (Peter Thiel) と野生動物のように激しく政治について論じました。そのときのカープはマルクス主義者でした。彼は法学の道を放棄し、1990年代半ばにドイツのフランクフルトのゲーテ大学に渡ります。そこは批判理論で高名なフランクフルト学派の本拠地でした。ハーベルト・マルクーゼ (Herbert Marcuse) 、ユルゲン・ハーバーマス (Jürgen Habermas) といった学派の中心的知識人たちは、ほとんどがナチスを逃れて亡命した左派ユダヤ人でした。彼らは一つの問いに生涯を捧げました。地球で最も発展し、最も教養のあった国がドイツであるのに、どうして15年にも満たぬうちにヒトラーを選び、ジェノサイドの蛮行に転げ落ちたのか。彼らの答えは暗いものでした。技術と科学の果てしない進歩が巨大な官僚制を生み、人間を一人の人格ではなく行政的単位として扱うようになり、その非人間化が結局ファシズムを孕むというものでした。

カープはその暗い結論をそのままは引き継ぎませんでした。ドイツのある小さな村で、彼は普通の老夫婦と深い会話を交わしました。彼らは彼に親切を尽くし、上着さえ与えてくれました。その一方で、私たちはみなナチスでしたと告白しました。カープが知りたかったのは、彼らがなぜファシズムを放棄して民主主義者になったのかということでした。答えは哲学ではありませんでした。彼らは第二次世界大戦後、占領軍として入ってきたアメリカの思考方式と圧倒的な体制が、自分たちをより健康で裕福で幸せにしたから変わったのだと言いました。この会話が彼を師匠たちから隔てました。ファシズムの本当の治療法は、人間を道具化する技術を抑制することではなく、アメリカ的思考方式の圧倒的優位と強力な力だという結論に彼は達しました。師たちが危険と見たその力を、弟子は予防薬と見たのです。

ここにこの本全体を貫く最大の矛盾が置かれています。ファシズムを最も恐れていると言った人が、そのファシズムが手に握れば誰より怖くなる道具を作りました。パランティアを批判する人たちの目には、その企業はジョージ・オーウェルの小説『1984』に登場するビッグ・ブラザーと変わりません。市民の税務記録と生体情報と個人データを一つに融合して、究極の国家監視ツールを作るとことです。フランクフルト学派が警戒していた正にそれです。人間を一人の人格ではなく行政的単位 (administrative units) に還元する技術。その学派の師匠たちの下でファシズムの起源を研究していた学者が、その危険を逆にねじって情報統制プラットフォームとして実装したのです。

彼はこの矛盾を隠しません。自分の本の表紙に「私たちの製品は時々、人を殺すのに使われている」 (our product is used on occasion to kill people) という文句をわざわざ引用したほどです。パランティアの技術は実際に戦場で標的を追跡し殺害するのに使われています。トランプ第一期の時代には、その技術がアメリカ移民税関執行局 (ICE) に提供され、違法移民を路上で追跡し、大規模に強制送還する作戦に使われました。無実の市民が巻き込まれるリスクを抱えながら。かつての進歩主義者だったカープは、市民団体とメディアの激しい非難とデモに直面しなければなりませんでした。ファシズムを恐れていたというその人が、権威主義政権の手に落ちたら誰より圧制的な武器になる技術を積極的に提供しているではないかということです。シュタインバーガーさえ、この矛盾をどう正当化できるのか (square that circle) 、骨の痛む問いを投げかけます。

カープは引き下がりません。彼は自分独自の地政学的論理で正面から当たります。パランティアの技術がファシズムを助長するのではなく、むしろ西側世界をファシズムの脅威から救済 (save) しているという主張です。彼に言わせれば、西方文明が自由と法の支配を守る唯一の道は、圧倒的な軍事技術とハード・パワーで敵が敢えて仕掛ける勇気さえ持たないようにする抑止力 (deterrence) を備えることだけです。彼はパランティアのデータ技術がヨーロッパ各地で起きるはずだった多くのテロを事前に防いだと言います。その結果、大衆が恐怖に包まれて極右ファシズム政党に票を集中させる惨劇を避ける

ことができたというのです。彼の計算はこうです。テロを防がなければ、人々は恐れてファシストを選ぶ。だからテロを防ぐ監視技術こそ、ファシズムを防ぐ防波堤だというわけです。

移民取り締まり論争においても、彼の姿勢は現実主義で一貫しています。進歩左派が無分別な移民に対する有権者の真摯な懸念を軽く見なしていれば、結局有権者はその問題を無慈悲に解決してくれる右派ポピュリストに投票を投じるだろうという診断です。それが正に最初が続いて第二のトランプ政権まで誕生させた理由だと、彼は鋭く指摘します。彼にとって、国家が国境を厳格に管理し、圧倒的な人工知能兵器システムを握ることは、ファシズムへの道ではなく、ファシズムを防ぐダムなのです。

実のところ、彼は自分を右派と呼びません。彼は左派が自分を去ったと言う人なのです。かつてマルクス主義者であり、ヒラリー・クリントンに投票したあの人が、今は民主党に向かってこれまで以上に切り詰めた言葉を注ぎ込みます。左派を去ったのではなく、左派に見捨てられたというのが彼の表現です。進歩的な家庭で育った進歩主義者が、トランプ政権の核となる技術を担当する立場に立っています。彼を保守に釘付けにすれば、生涯抱いてきた部外者の恐れが説明されず、彼を進歩に結びつけば、ICEに引き渡したデータが説明されません。彼はどちらのサイドにもきれいに収まりません。最初の章のあの子どものように、大人になっても、彼はどのグループの真の一部になることができないまま残っています。

この論理が正しいのか間違っているのかは、この本は答えません。答えるべきでもありません。カフ自身も、その答えを握っているとは思えません。ファシズムを防ぐためにファシズムの道具を作るという彼の計算は、見方によっては明晰な現実主義である可能性もあり、危険な自己欺瞞である可能性もあります。その判断は読者の責務として残しておきます。ただし、一つはつきりしていることがあります。その恐れが本当だということです。演技ではありません。30年前に子どもが言ったことと、58歳の大人が言っていることが同じであるという事実がそれを証言しています。

再びあのエピソードに戻ってみます。2016年、ルイ・モズレー (Louis Mosley) というイギリスの青年がパランティアの面接を受けるため、カフの事務所に座りました。彼の祖父はオズワルド・モズレー (Oswald Mosley) で、20世紀イギリス最悪の人物として挙げられる悪名高いファシスト指導者でした。ルイはそのレッテルのため、イギリスでは何度も職業生活に足を引っ張られてきました。進歩的でユダヤ系の血統を持つCEOの前で、彼は自分の出身がもう一度致命的な打撃になるだろうと確信し、びくびくしていました。

カフの反応は誰の予想も外しました。ルイが席に座るとすぐに、カフは彼の祖父オズワルド・モズレーが1939年に行ったあの悪名高いファシスト演説を、台本1枚もなく数分間かけてすべて暗唱し始めました。ファシズムを最も恐れていると言う人が、ファシストの演説を一字一句まで暗唱していたのです。恐れが深ければ、その対象をそれほど深く掘り下げてしまうのかもしれませんが。朗唱を終えたカフは、席から勢いよく立ち上がり、空中に向かって太極拳の動きを数回演じたかと思うと、一言の挨拶もなく事務所を出て行ってしまいました。面接を失敗したと確信して茫然としていたルイ・モズレーは、思いがけなく採用されました。彼は現在、パランティアのイギリスとヨーロッパ事業を主導する主要幹部です。

このワンシーン内にカフのすべてが含まれています。ファシズムに対する病的な執着、出身ではなく能力で人を見る頑固さ、剣を振るい挨拶もなく消える奇行。彼はファシストの孫を受け入れました。家系の罪で人を断罪しないこと、それこそが彼が恐れるファシズムの正反対だと考えたからでしょう。同時に彼は、そのファシズムが手に握れば人間を行政単位に還元して追跡し殺害する技術を作り売ってい

ます。同じ人間の中で、同じ一日の中で、二つの事柄が一緒に起こります。

だから、我々はこの人を一語に閉じ込めることができません。彼を単なる変人の天才として描くと、カップケーキのアイシングとノルウェーのスキーウェアだけが残し、恐れが消えます。彼を単なる冷笑的な権力者として描くと、ICEに引き渡したデータだけが残し、30年間消えない彼の恐怖が消えます。どちらも彼です。空いた家で一人スキーをする隠遁者であり、世界のデータを一つの画面に串刺しにする監視帝国の主人です。ファシズムが来たら最初に壁に掛けられるだろうと恐れる部外者であり、その壁を立てることができる道具を作る経営者です。

雪に覆われたレイマンの森に再び戻ります。彼は相変わらずそこで一人スキーをしています。ポールを突き、息を吐き、19キロメートルを走ります。何からそのように逃げているのか、あるいは何に向かってそのように走っているのか、彼自身も結局はつきりと答えることができないでしょう。恐れが彼を空き家に連れて行き、恐れが彼を巨大な会社に連れて行きました。同じ恐れが一人の人間を正反対の二つの場所に同時に引き連れて行きました。その矛盾は縫合されません。あるいは、縫合されてはいけなことなのかもしれません。ファシズムを最も恐れた人が築いた監視帝国。その一つの文が解けないまま雪原の上に残っています。

弁護士、前国会議員、AI政策研究者

kimkj.com

このAI書籍を応援する

この本が役に立った場合は、今後の翻訳、公開版、
AI知識プロジェクトをPayPalで応援できます。



PayPal

<https://paypal.me/kimkjkj>

QRコードを読み取るか、上のリンクを開いてください。